

動物學者はちよつて思案してから言つた。

「それもさうだな。」

サモイレンコはそつと指さきで窓を叩いた。ライエフスキイはびくつとして振り向いた。

「ヴァーニヤ、ニコライ・ヴァシーリイチが君に別れを告げたいと言ふんだ」とサモイレンコは言つた、「今發つところだ。」

ライエフスキイは机を起つて、扉を開けに支關へ出た。サモイレンコとフォン・コーレンと補祭は家にはいつた。

「ちよつと一分ほど」と動物學者は、支關でオーヴァッシュェーズを脱ぎながら、そして自分が情に負かされて招かれもせぬの上がり込んだことを後悔しながら、口を切つた。「出過ぎた形だな」と心に思ふ、『どうも愚劣だ。』——「飛んだ邪魔をして濟まんです」とライエフスキイの後から部屋に通りながら彼は言つた、「これから發つところで、急に會ひたくなつたのです。またいつ會へるか分かりませんからね。」

「非常に嬉しいです。……どうぞお掛け下さい」とライエフスキイは言つて、ぎごちない手附きで客に椅子をすすめた。まるで彼等の道を塞がうとしてゐるやうに見える。そして自分は部屋の真中に、手をこすりながら立ちどまつた。

「しまつた、立會人どもは往來へ置いて來るんだつた」とフォン・コーレンは思ひ、きつぱりした口調で、「僕のことを悪く思はんで下さい、イヴァン・アンドレーイチ。過去を忘れることは勿論できないことです。それは餘りにも悲しかつた。そして僕は何も、詫び言をいつたり、僕が悪くはないなどと言ひに來たものではありません。僕は誠意を以て行動したのですし、あれ以來僕の信念に變りはないのです。……成る程今になつて見れば、實によろこばしくも僕の君に關する見解は誤つてゐました。だが坦らな道でも躓くことはあるものですし、所詮人間の運命とはさうしたものです。大本に於いては誤らぬまでも、區々たる事については間違ふものです。誰もまことの眞實を知る者はないのです。」

「ええ、誰も眞實を知る者はありません……」とライエフスキイは言つた。

「では左様なら。……お互ひに健在であたいものです。」

フォン・コーレンはライエフスキイに手を差し出した。こちらはそれを握つて、頭を下げた。

「呉々も悪く思はんで下さい」とフォン・コーレンは言つた、「奥さんに宜しく。お別れの挨拶が出来なくて非常に残念ですとお傳へ下さい。」

「家に居りますが。」

ライエフスキイは扉口へ近づいて、次の間に聲を掛けた。

「ナーヂャ、ニコライ・ヴァシーリエヴィチがお別れをしたいと仰言るが。」

ナヂェージダ・フォードロヴナが出て来た。扉のところに立ちどまつて恐る恐る客達を見た。申譯なささうな怯えたやうな顔で、両手は叱られてゐる女學生のやうにしてゐた。

「僕はこれから發ちます、ナヂェージダ・フォードロヴナ」とフォン・コーレンは言つた、「で、お別れに上がりました。」

彼女はおつおつと彼に手を差し出し、ライエフスキイは頭を下げた。

『しかし、二人とも實にみじめな有様だ』とフォン・コーレンは思つた、『これまでになるには容易なことではない。』——「僕はモスクヴァへもペテルブルグへも行きますが」と彼は訊いた、「あちらから何かお送りするものはないですか？」

「まあ」とナヂェージダ・フォードロヴナは言つて、喫驚したやうに夫と眼を見合はせた、「別に何にも……」

「ああ、何にも……」とライエフスキイは手をこすりながら、「どうぞ皆さんに宜しく。」

フォン・コーレンはこのうへ何を言へるか乃至言ふべきか分からなかつた。先刻ここへ這入る時には、とても澤山の好いこと、温かなこと、大切なことを言はうと思つてゐたのだが。彼は無言でライエフスキイとその妻の手を握り、重い氣分で別れて出た。

「何といふ人達だ」と補祭が後ろから小聲で言つた、「ああ、何といふ人達だ。まことに神の右手がこの葡萄園を植ゑ給うたのだ。主よ、主よ。或る一人は數千人に打ち克ち、また或る一人は數萬人に打ち克つ。ニコライ・ヴァシーリイチ」と彼は有頂天になつて、「ねえ、あんたは今日、人類の最も大なる敵に打ち克つたのですよ——傲慢に！」

「もう澤山だよ、補祭君。僕やあの男がどうして勝利者なものかね。勝利者なら驚みたいに見えるやうなものだ。ところがあの男はみじめで、おどおどして、氣息奄々として、まるで支那の土偶みたいだし、僕は……僕は憂鬱なんだ。」

後ろで足音がした。ライエフスキイが見送りに追つて來たのだ。波止場には從卒がトランクを二つ持つて立ち、少し離れたところに轎子が四人ゐる。

「やつぱり吹いてるな……プルルル」とサモイレンコが言つた、「これぢや外海は荒けとるぞ、やれやれ。悪いときに發つもんだな、コーリャ。」

「僕は船酔ひは平氣だ。」

「そのことぢやないよ。……この馬鹿どもが君を引くり返さんけりやいいがな。代理店のランチで行くがいい。——代理店のランチは何處か？」と彼は轎子に叫んだ。

「もう出ました、閣下。」

「税關のは？」

「それも出ました。」

「なぜ報告に来んのか」とサモイレンコは腹を立てた、「間拔めが！」

「まあいいさ、心配し給ふな」とフォン・コーレンは言つた、「ぢや、お別れだ。丈夫でゐ給へよ。」

サモイレンコはフォン・コーレンを抱いて、三度十字を切つてやつた。

「僕のことを忘れないで呉れよ、コーリヤ。……手紙を呉れよ。……來年の春は待つとるぞ。」

「さよなら、補祭君」とフォン・コーレンは補祭の手を握りながら、「君の交誼と色々面白い話とを感謝する。探險のことは考へて置き給へよ。」

「いいですとも、世界の涯だつてもね」と補祭は笑ひだした、「厭だなんて言つてやしないぢやないですか。」

フォン・コーレンは暗闇のなかにライエフスキイの姿を認めて、黙つて手を差し出した。橈子達はもう下へ降りてボートを抑へてゐる。防波堤で大浪は遮つてあるのだが、それでもボートは杙にぶつかつてゐた。フォン・コーレンは梯子ケラツツを降りてボートに飛び込み、舵のところに坐つた。「手紙を呉れよ！」とサモイレンコは彼に叫んだ、「からだを大事にな！」

「誰もまことの眞實を知る者はない」とライエフスキイは、外套の襟を立て兩手を袖口に差し入れながら思ふ。

ボートは素早く埠頭を廻つて、沖へ乗り出した。波間に隠れるかと思ふと、すぐまた谷の底から高い丘へせり上がつて、人影から橈まで見分けられる。ボートは三間ほど出ると、二間ほど投げ戻される。

「手紙を呉れよお」とサモイレンコは彼に叫ぶ、「悪魔めが、とんだ天氣に君を引つ張りだしたなあ。」

「さうだ、誰もまことの眞實を知るものはない……」とライエフスキイは、悲痛な眸を荒れ騒ぐ暗い海に注ぎながら思ふ。

「ボートは投げ戻される」と彼は思ふ、「二歩出るとは一歩さがる。けれど橈子は頑強だ。たゆまぬ橈を働かせて、高い波も怖れない。ボートはだんだん前へ出る。ああもう見えなくなつた。半時間もすれば橈子の眼に、はつきりと船の燈あかりが見えだすだらう。一時間もすればもう船の舷梯ケラツツに着くだらう。人生もこれと同じだ。……眞實を求めて人は、二歩前へ出るとは一歩さがる。悩みや過失や生の倦怠が、彼等をうしろへ投げもどす。が眞實への熱望と不撓の意志とが、前へ前へと驅り立てる。そして誰が知らう、恐らく彼等はまことの眞實に泳ぎつくかも知れないのだ……」

「左様ならあ、あ、あ！」とサモイレンコが叫ぶ。
 「もう見えも聞こえもしない」と補祭が言ふ、「道中お大事に！」
 雨がぼつぼつ落ちて来た。

妻

——八六二五——

私はこんな手紙を貰った。——

203

妻

『パーヴェル・アンドレーヴィチ様尊下。御住居に程遠からず、すなはちペストローヴォ村に、傷ましき事實の發生を見つづありますにつき、御一報申し上げますことを私の義務と存ずる次第でございます。同村の農民はこぞつて農舎及び全財産を賣却致し、トムスク縣に移住いたしましたのでありますが、目的地に到らずして戻つて参つたのでございます。さて申すまでもなく同村にはもはや彼等の持物とは一物も無之、現在悉皆人手に渡つてをります次第にて、農舎一軒につき三乃至四世帯つつも居住いたし、戸毎の人員は幼兒を除くもなほ男女併せて十五人を下らず、遂には食物も相盡き、飢餓はもとより、一人として飢餓性もしくは發疹性のチフスに感染せざるはなく、村民ことごとく文字通り罹病いたしをります。女醫補の曰く、一步農舎に入りて睹るところは何ぞ、みなこれ病者、悉く熱に浮かされ、或ひは高笑ひし或ひは壁に攀ぢ、農舎の中は汚臭鼻を衝き、水を與ふる者なく、水を運ぶ者なく、食物としてはひとり凍れる馬鈴薯あるのみと。女醫補及びソーポリ（當地の郡會醫）も、藥餌よりはパンを先決問題とするとき、固よりパンの持ち合はせはなきものゆゑ、如何とも手の下しやうなき次第でございます。郡會にては、該農民等は

既に郡自治體より除籍せられトムスク縣下に籍を置くものなるを楯に給與を拒み、且つまた資金も無いのでございます。右ここに御報告申し上げ、且つは貴下の御仁愛を知りつつ、早急の御援助を願ひ奉ります。貴下の多幸を祈る者より。』

明かにこれは、その女醫補自身が、でなければこの獸の名前を持つた醫師★が書いたものに違ひない。一體が郡會醫とか女醫補とかいふ連中は、彼等には何ひとつ出来はせぬといふことを、多年にわたつて日一日と納得しながら、なほ且つ凍つた馬鈴薯だけで命をつないでゐる人達から俸給をもらひ、なほ且つ私が仁愛に富むか否かを論ずる資格があると自惚れてゐるのだ。

妻

匿名の手紙には煩はされるし、毎朝どこかの百姓達が召使の臺所へ上がり込んで来て膝をつく始末だし、前以て壁を破つて一夜のうちに納屋のライ麥を二十俵も引いては行くし、それに人の話や新聞や悪天候が裏書きする一般の重苦しい空氣——すべてさうしたものに煩はされて、私は仕事に元氣が出ず一向捗々しく行かなかつた。私は『鐵道史』を書いてゐたので、數多い内外の書籍やパンフレットや雜誌記事に眼を通さなければならぬし、算盤をはじき對數表をめくり、考へ、ペンを動かし、それからまた讀み弾き考へなければならぬのだつた。ところが、本に向ふか考へはじめるとしたら最後、忽ち頭がこんぐらかり眼を細くせずにはゐられず、私は溜息をついて机を離れて、荒れるにまかせた自分の田舎別荘のただつ廣い部屋から部屋へ、歩き廻りはじ

妻

めるのだつた。歩き飽きると、私は書齋の窓際に立ちどまつて外を眺める。わが家の廣い構内を越え、池を越え葉を落した若い白樺の林を越え、つい此の間降つて融けかけてゐる雪に蔽はれた廣漠たる野づらを越えて、地平線の丘のうへに、褐色の農舎の一かたまりが見える。そこから、眞白な野づらをくねくねした帯をなして、黒い泥濘の道が下りてくる。これがペストローヴォ、つまり匿名の筆者が書いてよこした例の村なのである。もしここに、雨か雪模様の前觸れに啼きながら池や野の上を舞つてゐる鴉の影もなく、大工小屋の槌音もして來なかつたら、いま世間から大騒ぎをされてゐるこの小つぼけな世界は、死海そつくりに見えたに違ひない。それほどに此處のすべては静まり返つて、ひそとも動かず、生氣なく、もの淋しかつた。

仕事をしようにも精神を集中しようにも、落ちつかぬ氣持に妨げられた。一體どうしたのか自分でも分からず、幻滅のせむにしようと思つてゐた。實際私が鐵道省を辭してこの田舎へやつて來たのは、靜かな生活をして、社會問題の著述に従ひたいからであつた。それは私の久しい前からの宿願であつた。ところが今では靜安とも著述とも別れ、一切を放抛して、ただ百姓達の事に心を使はなければならぬのだ。それも他に仕様がなといふのは、私の深く信ずる所によれば、私のほかには絶対に誰一人として、この郡には飢民を助けようとする者はないのである。あたりを見廻しても、無教育な頭の程度の低い不人情な連中ばかりで、その大多數は不正直者か、或ひ

は正直者でも無分別で浮はつた、例へば私の妻みたいな人間ばかりである。かうした連中を當てにする譯には行かないし、といつて百姓達を見殺しにする譯にも行かないとなれば、必要の前に身を屈して、自分で百姓達の處置に手をつける他はないのだつた。

まづ手はじめに私は、飢民のため五千銀ルーブルを寄附することに決めた。ところがこれで私の落ちつかぬ氣持が鎮まるところか、却つて烈しくなるばかりであつた。窓際に佇んだり部屋部屋を歩き廻る私を、それまでにはなかつた問題が惱ますのだつた——この金をどう使ふべきか？ 召使に穀類を買はせて、小舎ごとに分配して廻らせるか。それは、忽忙の際とて飽食者や高利貸の方へ、飢ゑた者の二倍もやつてしまふ危険は問ふまでもないとして、到底一人の手には負へぬ仕事である。お役所といふものを私は信用しない。郡會の上役とか課税監督官とかいふ連中はみんな若い男ばかりで、現代の物質至上主義の無理想な青年一般に對すると同様、私は彼等に信用がおけないのだつた。郡會にせよ郷役場にせよ、また一般に郡に屬する役所はどれもこれも、その援助を求めようといふ毛の先ほどの氣持も私に起こさせなかつた。かうした役所が、もう自治體や政府の揚饅頭ビロイグの中身をしゃぶり盡くして、何かまた第三の揚饅頭ビロイグにしゃぶり附かうと、毎日口舐めずりしてゐることは私には分かつてゐた。

そこで、近隣の地主連を招いて、私の家に何か委員會とか本部みたいなものを組織し、一切の

寄附はそこに集まり、又そこから郡ぢうに救恤品や指命が出るやうにすることを提議しては、といふ考へが浮かんた。このやうな組織ならば、頻繁に協議もできるし、廣範圍に思ふままの統制もできて、私の考へにも全く合致するのである。しかし私は、間食だの晝飯だの晩飯だの、また騒々しさ、遊惰、お喋り、下品さなどといふ、この郡下の雑多な連中が私の家へ持ちこむに極まつてゐるものを想像すると、急いで自分の考へを振り棄ててしまつた。

次に家の者と來たら、その助力なり支援なりを期待することは、私にとつて最も望みが薄かつた。私の第一の家族、すなはち父の時代の家族は、曾ては騒々しい大世帯だつたこともあるのだが、生き残りつてゐるのは家庭教師のマドモアゼル・マリ、或ひは今の呼び名で言へばマリヤ・ゲラーシモヅナ一人きりで、これは全く取るに足らぬ人物である。この小さな几帳面な七十婆さんは、薄鼠色の服をちゃんと着て、白い飾りリボンのついた頭巾をかぶり、一見陶器人形といった姿で、いつも客間に坐つて本を讀んでゐた。私が傍を通りかかると、私の思案のもとを知つてゐる彼女は、きつとかう言ふのだつた。

「一體どうしようと仰言いますの、パーシャ？ かうなることは、もう前にも申し上げたぢやありませんか。召使しよの者を御覽になればお分かりの筈ですよ。」

私の第二の家族、すなはち妻のナターリヤ・ガヴリーロヴナは、階下したの部屋をみんな占領して

暮らしてゐた。食事も睡眠も自分の客の應接も、彼女は階下の自分のところで済まして、私がどんな食事をするか、どんな寝方をするか、どんな客に會ふかには、一切お構ひなしであつた。既に久しくお互ひに疎遠になつて、すぐ上と下の階に住みながら近いといふ氣さへせぬ人達のやうに、私たち二人の間柄は至極簡單で氣苦勞もなかつたが、その代り冷淡で空虚で張合ひがなかつた。以前ナタリーヤ・カヴリーロヴナが私の胸によび起こした燃えるやうな苛立たしい愛情、あるときは甘くあるときは苦艾じがよきのやうに苦がい愛情は、今はもうなかつた。昔のすぐカツとする癖、聲こはだか高な口争ひ、非難、怨言、そしてお互ひの憎惡が堰を切つた擧句は、通例妻の外國行き乃至は實家行きとなり、私は私で妻の自尊心をなるべく度々傷めつける目的で、金をちびちびと力めて何度にも送つてやる始末になる——といふことももう無くなつた。(傲慢で自尊心の強い妻とその實家の者は、私の金で暮らしてゐるので、妻はいくらじたばたしても私の送金を斷るわけには行かない。これが私に満足を齎あたらしたし、悲しいときの唯一の慰めでもあつた譯だ)。今では、偶然に階下の廊下や庭先で顔を合はせることがあると、私はお辭儀をし、彼女は愛想のいい笑顔を見せるのである。それからお天氣の話をし、どうやらもう窓の二重枠をはめる時分だとか、誰かが鈴音を立てて池の堤を乗つて行つたとか、さういつた話をする。そのとき私は妻の顔に書いてある字を讀む——『私は貞女よ、あなたの大切にしてくらつしやる立派なお名前を、傷けなんか

しませんわ。あなたもお利口さんで、私の邪魔をなさらないわね。これで五分五分よ。』

もうとうの昔に私の愛は消えてしまつた、仕事があんまり私の奥深くに喰ひ入つてしまつたので、妻との間柄などは本氣に考へてゐる暇はないのだ、と私は思ひ込まうとするのだつた。しかし嗚呼、私はたださう考へたに過ぎない。妻が階下で聲高に話をしてゐると、ひと言だつて聞きとれはせぬくせに、私は一心に彼女の聲に耳を澄ました。彼女が階下でピアノを弾いてゐると、私は立ちあがつて聞き入つた。彼女の馬車か乗馬が曳きだされると、私は窓際に寄つて彼女が家から出てくるのを待ち、やがて彼女が馬車や馬に乗るところ、庭先から出て行くところを見守つた。私は自分がどうかしてゐるやうな氣がし、眼付きや顔色にそれが現はれはしまいかとびくびくした。私は妻の姿を見送つてからも、ふたたび窓から彼女の顔や肩や外套や帽子を見るために、その歸りを心待ちにした。私は淋しく悲しく、無性に何か惜しまれてならず、妻の留守のまに彼女の部屋部屋をぶらついて見たくなつたり、お互ひの性格が合はぬため私と妻とでは解決のつかぬその問題が、早くひとり手に自然的な道順で解けてしまへばいい——つまり、早くあの美しい二十七歳の女が老けこんで、はやく私の頭が白髪になれればいいと願つたりした。

ある日の朝食のとき、私の領地の管理人ヴラヂーミル・プローホルイチが、ペストロトヴオの百姓達は家畜の飼料に、たうとう藁屋根まで剝ぎはじめたと私に報告した。マリヤ・ゲラーシモ

ヴナは怯えきつた當惑さうな顔で私を見た。

「私に何が出来ますか」と私は彼女にいつた、「戦場の單騎は戰士にあらず、ところが私は、この頃のやうに孤獨を感じたことは未だ曾てないですよ。もし頼みにできる男をこの郡ぢうに一人も見附けて貰へるなら、お禮は惜しまんつもりだが。」

「ぢやイヴァン・イヴァーヌイチをお招びになつたら」とマリヤ・ゲラーシモヴナが言つた。

「さうだつた！」私は思ひだして嬉しくなつた。「それは思ひ附きだ！ 全くだ」と、イヴァン・イヴァーノヴィチに手紙を書くため書齋へ向ひながら、私は口ずさんだ、「全くだ、全くだ……。」

二

かれこれ二十五年から三十年の昔にならうか、この家に來て飲み、食ひ、假面舞踏に集まり、戀をし、結婚をし、自分達のすばらしい獵犬や馬の話で人をうんざりさせた大勢の知人の中で、生き残つてゐるのはイヴァン・イヴァーヌイチ・ブラーギン一人きりであつた。曾ては彼も非常なやり手で、饒舌で喧まし屋で惚れつぽい男で、その過激な傾向と、ただに女性のみならず男性をも魅惑する一種特別の表情とを以て鳴つてゐた。今ではもうすつかり老い込んで、ぶくぶく肥

つて、傾向も表情もなく餘生を送つてゐる。彼は手紙を受けとるとすぐその翌日にやつて來た。

丁度夕方で、食堂では今しがたサモヴァルが出たところ、ちつちやなマリヤ・ゲラーシモヴナが檸檬^{レモン}を切つてゐた。

「やあよく來て呉れたな、君」と、出迎へながら私は陽氣に言つた、「だが君は益々ふとるなあ。」

「この僕のは肥るんぢやない、腫れ上がったのさ」と彼は答へた、「蜜蜂に刺^やられたもんでね。」自分の肥りやうを自ら擲擻して見せる男の氣置きのなさで、彼は兩手を私の胴に廻し、小ロシヤ風に前髪をお河童にした柔らかな大きな頭を、私の胸に寄せかけて、甲高い老人の笑ひごゑで笑ひこけた。

「だが君はますます若返るなあ」と彼は笑ひのひまからやつと言つた、「全體どんな染毛劑でその髪や髯を染めるのかね、僕にも呉れりやいいに。」彼は鼻をふうふう云はせて、喘ぎ喘ぎ私を抱擁し、頬に接吻して、「僕にも呉れりやいいに……。」と繰り返した。「ときに君は、四十だつたつけな。」

「いやあ、もう四十六だよ」と私は笑ひだした。

イヴァン・イヴァーヌイチは牛蠟と料理場の油煙の臭ひがして、いかにも人柄に合つてゐた。

大きくてぶくぶくした鈍重な圖體は、ボタンの代りにホックと環がついて胴の括りの高い、馭者の上衣によく似た長いフロックにすつぽり嵌まつてゐるのだから、もしこの男から例へばオーデコロンオードの匂ひでもしようものなら、それこそをかしいに違ひない。もう久しく剃つてない鳩羽色の、まづ牛蒡ウズといった感じの二重顎にも、飛びだした眼にも、息ぎれの様子にも、不細工な無精たらしい姿全體にも、聲音にも笑ひごゑにも言葉にも、その昔郡下の良人達をしてその妻を嫉妬させた、すうりとした美貌の話上手の面影はなかつた。

妻 「實はね、大いに助けて貰ひたいことがあるんだ」と、もう二人で食堂に坐つて茶を飲んでゐるとき、私はいつた、「飢ゑてゐる百姓のため、ひとつ救済の擧を起ささうと思ふんだが、どこから手をつけたらいいのか分らんのだ。と言ふわけだが、君ならきつと何か智慧を借して呉れるだらうね？」

「さう、さう、さう……」とイヴァン・イヴァーヌイチは溜息まじりに言つた、「なある、なる、なる……」

「僕は君に心配をかけたくなかつたんだが、しかし全くのところ君のほかには、君、持ち掛ける相手は斷然一人もないのだ。君も知つてゐるね、ここの連中がどんなだか。」

「なある、なる、なる……さう……」

私は思つた——今はじまらうとしてゐる協議は眞面目な事務的なもので、それには地位や私情にかかはりなく、誰にでも参加して貰つて差支へない。ではひとつ、ナターリヤ・ガヴリーロヴナを招んではいけないだらうか。

「三人寄れば文珠の智慧！ *」私は陽氣にいつた、「どうだね、ひとつナターリヤ・ガヴリーロヴナを招んで見たら。君はどう思ふね？ フェーニャ」と私は小間使に、「ナターリヤ・ガヴリーロヴナに、もしお差支へがなかつたら、すぐ二階までお越しを願ひたいと申し上げてお呉れ。非常に大切な用件だと申し上げてな。」

妻 暫くすると、ナターリヤ・ガヴリーロヴナがはいつて來た。私は起ちあがつて、彼女を迎へながら言つた。

「ナタリイ、わざわざお呼び立てをして濟まなかつたが、實はいま非常に重大な問題を話し合つてるところだね、あんたのいい智慧を拜借したらといふ考へが、幸ひにしてわれわれの頭に浮かんだといふ譯だ。無論借して頂けるだらうね。さ、どうぞお掛け下さい。」

イヴァン・イヴァーヌイチはナターリヤ・ガヴリーロヴナの手に、彼女は彼の額に接吻した。それから三人して卓を圍んで坐ると、彼は涙ぐんでいかにも幸福さうに彼女を眺めながら、彼女の方へ身を伸ばして再びその手に接吻した。彼女は黒のドレスを着て、入念に髪をととのへ、爽

やかな香水の匂ひを立ててみた。明かにこれから訪問に出るところか、誰か客を待ち受けてゐるところだつたと見える。食堂にはいると、彼女はあつさりとお親しげに私に手を差し伸べ、イヴァン・イヴァーヌィチに對すると同じに、愛想よくにつこりして見せた。これは私の氣に入つた。しかし彼女は、話をしながら指を動かしたり、頻繁に勢よく椅子の脊に凭れかかたりして、早口に喋るのだつた。この物言ひと動作にあらはれた斑氣な落ちつきが無さが、私をいらいらさせ、彼女の生まれ故郷——オデッサのことを思ひ出させるのだつた。いつかその男女と付き合つて見て、私はその下品さに閉口させられたことがあるのだ。

「僕は、飢ゑた人達のため何かしてやりたいと思ふのだが」と私は口を切り、少し沈黙してから言葉をつづけた、「そりや無論、金は大事な問題だが、單に金錢の喜捨だけにとどめて、それですら安んずるとしたら、最も重要な骨折りを回避するといふことになると思ふ。救済は結局金の問題になるには違ひないが、肝腎な點はその組織の正しさ眞摯さにあるのだ。で諸君、ひとつ考へて見ようぢやないか、そして何かやらうぢやないか。」

ナターリヤ・ガヴリーロヴナは物問ひたげに私の方を見て、肩をすくめた。「私に何が分かりませう」とでも言ひたさうに。

「そ、さう、飢饉……」とイヴァン・イヴァーヌィチはもぐもぐ始めた、「實際まつたく……」

さう……」

「事態は重大だ」と私はいつた、「救済は火急を要する。僕思ふに、われわれが立てねばならぬ原則の第一箇條は、すなはち迅速といふことだ。軍隊式に、目測、機敏、急襲だ。」

「さう、機敏だ……」とイヴァン・イヴァーヌィチはまるでうとうとしかけたやうに、睡たげなだるさうな聲を出した、「ただ何とも仕様はあるまいな。凶作だつた、だもんでこんなことになつた……こればかりは如何なる目測も急襲も突破はできないな。……自然力さ。神と運命には抗へない。……」

妻

「その通りだ。だが人間が頭を授かつてゐるのは、諸々の自然力と闘争するためぢやないか。」

「ええ？ ああ……そりやさうだ、その通り。……さう。」

妻の顔を見ました。

「僕のところでもさつぱり何も收れなかつた」と彼は細い聲で笑ひだし、さもそれがひどく可笑しいことのやうに、ちらと内證の目配せをして見せた、「金もない、穀物もない、だのに構内と來たらまるでシレメーチェフ伯*のお邸みたいに、お百姓で一杯だ。頸根つこを撮まんで追ひ出しちまはうと思ふが、可哀さうな氣もしてね。」

ナターリヤ・ガヴリーロヴナは笑ひ聲を立てて、イヴァン・イヴァーヌイチに、その家のことを根掘り葉掘り訊ねはじめた。彼女のゐるお蔭で、私はもう久しく覺えたことのない愉快な氣持になり、この祕かな感情がどうかした拍子に眸にあらはれはしまいかと思つて、なるべく彼女の方を見ないやうにしてゐた。何しろ二人の間柄が間柄なので、さうした感情のあらはれは、突拍子もない滑稽なものに見えまいものでもないのだ。妻はイヴァン・イヴァーヌイチと話し込んで笑つてゐる、自分が私の部屋にゐることも私が笑はぬことも、一向に氣にしてゐなかつた。

「すると諸君、どうしたもんだらうね」と私は話の切れ目を待つて訊いた。「僕思ふに、われわれは先づ手始めに、一刻も早く寄附の募集を始めようぢやないか。でナターリヤ、僕達はそれぞれ帝都とオデッサの知人に手紙を出して、寄附の勧誘をする。そして幾分なりと集まつて來たら、僕等は穀類と家畜の飼料の買付けにかかり、君は、イヴァン・イヴァーヌイチ、御面倒だが救恤品の配給の方を受持つて呉れ給へ。一切は君の持前の如才なさと經營の才に信賴するが、まあ僕等として一言希望を述べさせて貰へば、君は救恤品を配給するに先だつて、現地の情勢を逐一研究して呉れ給へ。またこれもやはり大切なことだが、穀類が本當に困つてゐる人間にだけ渡つて、酔どれや怠け者や、乃至は高利貸の輩には、決して渡らんやうに監視して貰ひたいのだ。」

「そ、さう、さう……」とイヴァン・イヴァーヌイチはもぐもぐ始めた。「なある、なある、なある……」

「ええ、この涎垂れの廢人相手ぢや粥は煮えんわい」と私は思ひ、心の苛立ちを感じた。

「飢民連中にやもう懲り懲りしたよ、畜生めが。年ぢうぶすくさ言ひをる、年ぢうぶすくさ言ひをる」とイヴァン・イヴァーヌイチは、檸檬レモンの皮をしゃぶりながら言葉をつづけた。「飢民は腹の満ちい連中のことをぶすくさ言ふ。穀物のどつさりある連中は、飢民のことをぶすくさ言ふ。さうとも。……飢ゑのため人間は頭が變になる、鈍どんする、兇暴になる。飢ゑは甘いもんぢやない。飢ゑりや亂暴なことも言ふ、盗みもする、いやもつと悪い事だつてし兼ねない。……これが分かつてなくちや駄目だ。」

イヴァン・イヴァーヌイチはお茶に噎ひせて咳き入り、首を絞められたやうなきんきんした笑ひで、總身を顫はせはじめた。

「そも戦ひはポ……ポルタヴァの！」と彼は、笑ひと咳とで口が利けず、両手で拂ひのけるやうな恰好をしながら、やつとこさで言つた。「そも戦ひはポルタヴァの！ 農奴解放の年から三年ほどしてだつたが、この近在二郡に飢饉があつたんだ。今は故人になつたが、フォードル・フォドリチが僕の所へやつて來てね、來て呉れと言ふ。行かうよ、さ、行かうよつて、まるで咽喉もとへ短刀どすでも突付けさうな劍幕だ。ああいいとも、ぢや行かうつて譯でね、早速連れだつて出

掛けた。時しも頃は夕まぐれ、ちらちら白い物が降つてゐた。彼の屋敷に近くなつた頃はもう眞夜中だつたが、矢庭に森の中からズドンと來た！ もう一ぺんズドン！ ひやあ、畜生め！……といふ譯でね、僕は櫓から飛びだして見ると、暗がりの中を一人、膝まで雪に埋めながら僕めがけて向つてくる奴がある。僕は其奴の兩の肩へ、それかういふ具合に腕を廻してね、握つてゐる種子島を叩き落した。そこへ又一人とび出した。其奴の頸根つこへガンと呉れたところが、ぎやつと一聲、雪の中へ鼻を突込んで伸びちまつた。その頃は僕も頑健でね、馬鹿力があつたものさ。まづ二人を軽くひねつて置いて向ふを見ると、フェーヂャはもう三人目の奴に馬乗りになつてゐる。僕等はこの三勇士をそのまま引つたてた。そりや兩手を後手に縛つてね、僕等にも自分等にも悪戯が出来んやうにして、馬鹿者どもを臺所へ引つぱり込んだ。奴等が憎くもあれば、顔を見るのが氣恥かしくもあるつて譯さ。何しろよく知つてゐる百姓達でね、いい人間なんだ。氣の毒になつたよ。恐怖のあまりまるで痴呆になつてゐた。一人は赦して呉れとめそめそ泣くし、一人はまるで獸みたいになつて罵詈雑言する、三人目は跪いてお祈りを上げてゐる。僕はフェーヂャに言つた、まあ腹を立てるな、この卑劣漢どもを放してやれ。彼は奴等に物を食はしてね、麥粉一ブード*づつ背負はして放してやつた、消えて失くなれ！ つてね。まあそんな具合だつたよ。……天國へ往かしめ給へ、永遠に安らはんことを！ あの男は話が分かつてゐて、別に腹も立て

なかつたが、世間には腹を立てた連中もゐてね、そのためどれだけの人間を臺なしにしてしまつたことか。さうさ……。クロチコーフの酒場の事件だけでも、十一人から懲役に行つたからね。さう……。現に今だつて見給へ、同じことだ。この木曜、僕の家で豫審判事のアニーシインが泊つて行つたがね、どこかの地主の話をして呉れた。……さう……。夜中のうちにその地主のこの納屋の壁を崩してね、ライ麥を二十俵引いて行つたんだ。朝になつてその地主が、自分のところでさうした刑事犯の行はれたのを聞くと、早速ぶうんと縣知事へ電報を飛ばした、も一つぶうんと検事へ飛ばした、三つ目を署長へ、四つ目を豫審判事へ……。誰しも告口屋の怖いのは知れたことだ。そこで偉い人達が仰天して、大騒ぎになつた。村を二つ隈なく探したんだ。」

「お話中だが、イヴァン・イヴァーヌイチ」と私は言つた、「ライ麥二十俵は僕の所で盗られたのだ。知事へ電報を打つたといふのは僕さ。ペテルブルグへも打つたよ。だがそれは決して、君が言はれるやうに告口が好きでやつた譯でもなく、また僕が腹を立てたからでもない。あらゆる問題を、僕は先づ原則の側から見るのだ。満腹してゐる者が盗まうと飢ゑた者が盗まうと、法律にとつては無差別だ。」

「そ、さう……。」とイヴァン・イヴァーヌイチはどぎまぎして口籠もつた、「無論それは……成る程、さう……。」

ナターリヤ・ガヴリーロヴナがさつと氣色ばんだ。

「かういふ方がありますのね……」と彼女は言ひさしてやめた。彼女は冷靜を装はうと懸命に自分を抑へてゐるが、到頭こらへ切れずに、私には馴染のふかい例の瞋恚の眸でわたしの眼を睨みつけて、「かういふ方がありますのね」と言つた。「飢饉も氣の毒な人達の艱難も、ただ御自分の邪まなみすぼらしい根性の吐き散らし場所としての他には、意味がないといふやうな。」

私は狼狽して肩をすくめた。

妻 「あたくし一般のことを申してをりますのよ」と彼女は續けた、「恐ろしく冷淡で、同情心などはまるつきり無いくせに、そのくせ御自分の世話にならずに切り抜けるのが怖さに、人の艱難を見過ごすことができず、喙を容れるといふやうな方がありますのね。さういふ方の虚榮心にかかつては、何一つ神聖なものはないのですわ。」

「かういふ人もあるね」と私は物柔らかに言つた、「天使のやうな性質の持主でありながら、その歎賞すべき思想を表現する形式を以て見ると、さて天使やら、オデッサの市場の物賣り女やら、識別がつき兼ねるといふ風なね。」

甚だまづいことを言つたものだと、自分でも知つてゐる。

妻は私を一瞥したが、その顔附で見ると、黙つてゐるには餘程の努力を要したらしかつた。彼

女の不意な氣色ばみやう、それから私の飢民救済の希望に関する場所がらわきまへぬ懸河の辯、この二つはいくら内輪に見積つても時宜に適せぬものであつた。彼女を二階へ招いたときの私の氣持では、自分及び自分の目論見に對する彼女の全然ちがつた態度を期待してゐた。何を期待してゐたかをはつきり言ふことはできないけれど、とにかくその期待は私を楽しく興奮させてゐた。さて今となつては、飢民の話を繼續することは困難でもあり、また恐らくは賢明でもなからうことを、私は見て取つた。

妻 「さう……」と折悪しくイヴァン・イヴァーヌイチが呟きだした、「商人のブーロフの所には四十萬はある、もつとあるかも知れん。だから私はかう言つてやる、『出してやれよ、なあ同名者*、窮民達に十萬か二十萬ほどさ。どうせ何時かは死ぬんだし、あの世へ擔いぢや行けないからなあ』つてね。奴さん腹を立てた。だがやつぱり死ぬことは死ぬんだ。死は甘いもんぢやない。」

ふたたび沈黙が來た。

「するとつまり残る途はただ一つ、孤獨と仲直りをするだけか」と私は溜息をついた、「戦場の單騎は戦士にあらず。なかに、構ふものか。單騎で戦つて見ようよ。おそらく飢饉との戦ひは、冷淡との戦ひよりは巧く行くだらうよ。」

「あたくし、階下に待たせてありますから」とナターリヤ・ガヴリーロヴナが言つた。彼女は

卓を離れて、イヴァン・イヴァーヌイチに、「では後刻階下のあたぐしの所へちよつとお寄り下さいましね。いまはお別れを申しませんわ。」

そして出て行つた。

イヴァン・イヴァーヌイチは既に七杯目の茶を飲んでゐた。息をはずませ、唇をびちやびちや云はせ、口髭をしゃぶつたり、檸檬の皮をしゃぶつたりして。彼は睡たげなだるさうな調子で何かもぐもぐ言つてゐるが、私はそれには耳も藉さずに、彼の出て行くのを待つてゐた。到頭、腹いつぱい茶を飲むだけに私の所へやつて来たやうな顔をして、彼は立ち上がつて別れの挨拶をばじめた。彼を送り出しながら私は言つた。

妻

「結局君は何の助言もして呉れなかつた譯だな。」

「え？ 僕は青ん脹れの老いぼれさ」と彼は答へた、「僕の助言が何になるもんか。それに君は無駄な心配をしてるんだよ。……僕には全く分からんな、君が何で心配してるのか。まあ心配し給ふな、いい子だから。僕が請け合ふよ、心配することなんか何一つありはしないんだよ……」彼は私をまるで子供のやうに宥めながら、眞心をこめて勉るやうに囁いた、「請け合ふよ、何にもありはしないんだよ……」

「どうして無いものか。百姓は農舎の屋根を剝がしてゐるし、もう何處かにチフスが出たといふ話だ。」

「で、それがどうだと言ふのさ。來年はまた豊作で、新しい屋根が出来たらうよ。また僕等がチフスで死んだとしたつて、そのあとには他の連中が住むだらうぢやないか。晩かれ早かれ、どうせ死ななけりやならんのだ。心配し給ふな、なあ君。」

「僕は心配せずにはをられんのだ」と私は苛々して言つた。

私達は燈火のうす暗い控間に立つてゐた。イヴァン・イヴァーヌイチは突然わたしの肘を捉へ、一見何か非常に重大なことを言はうとしてゐるやうな風で、半分間ほど無言で私を見つめた。

妻

「パーヴェル・アンドレーイチ」と彼は小聲でいつた。と、彼の硬張らせた脂ぎつた顔と暗い眼に突然、その昔鳴らせたあの一種特別の表情が閃めいた。それは全く魅力のあるものだった。「パーヴェル・アンドレーイチ、友達として僕は言ふんだが、君のその性格を變へたまへ。君は付き合ひにくい男だよ。なあ君、實に付き合ひにくいよ。」

彼はちつと私の顔を見つめた。素晴らしい表情は消え、眼眸はどんよりとして、ふうふう鼻を鳴らしながら懶げに呟いた。

「さう、さう……老人の繰り言だ、許し給へ。……愚痴さ。……さう。……」

身體の平均をとるため両手を擴げ、脂肪ぶとりの大きな背中と赤い後頸を見せながら、重さう

な足どりで階段を降りて行く彼の後姿は、何か蟹類のやうな不快な感じだつた。

「君はどこかへ出掛けるといいんだよ、なあ閣下」と彼はもぐもぐ言つた、「ペテルブルグか外國へでもね。……こんな所に住んで黄金の時間を空費する手はないんだ。君は若いし丈夫だし金持だし。……さう。……ええくそ、僕だつてもう少し若けりや、兎みたいに跳びだして、耳で風を劈つて廻るんだがな。」

三

妻

妻の遽かの逆鱗は、私に自分達の夫婦生活を思ひ出させた。以前にはかうした赫怒のあとでは、お互ひに打ち克ちがたい牽引を感じるのが常で、どつちからともなく一緒になつて、平生から胸にわだかまつてゐたあらん限りのダイナマイトを行使するのであつた。今も、イヴァン・イヴァーヌイチが出て行つたあとで、私ははげしく妻へ牽きつけられた。階下へ行つて、お茶の時の彼女の行状が私の面目を潰したと、彼女は不人情なみすぼらしい女で、とてもその町人根性ぢや、私の言ふこと私の爲すことが分かるやうになる見込みはない、と言つてやりたかつた。私は長いこと部屋から部屋へ歩き廻つて、言つてやることを思ひめぐらし、彼女が何と言ひ返すだらうかを思ひ量つた。

妻

近頃私を惱ましつづけてゐた不安な氣持が、その晩イヴァン・イヴァーヌイチが出て行つたあとでは、特に何かしら苛立たしい形をとつてゐるやうに感じられた。私は腰を下ろすことも立つてゐることも出来ず、やけに歩き廻るのだつたが、それも燈火のついてゐる部屋だけを選び、且つマリヤ・ゲラーシモワナのある部屋の近くから離れなかつた。いつか北海で暴風に逢つたとき、積荷も底荷もないその船が引くり返りはしまいかと船中の皆が心配した、その時の氣持によく似た氣持であつた。その晩私は、自分の不安は私が以前想像したやうに幻滅なのではなく、何か別のものであることを覺つた。しかしそれが果たして何であるかが分からず、そのために私は益々いらいらするのであつた。

『彼女の所へ行かう』と私は思ひ定めた、『口實は見附かる。イヴァン・イヴァーヌイチに用があると言はう、それだけの話だ。』

私は下へ降りて、いそがず絨毯づたひに控室と廣間を通り抜けた。イヴァン・イヴァーヌイチは客間の長椅子に掛けて、また茶を飲みながらもぐもぐ言つてゐた。妻はその向ひに、肘掛椅子の背に手をかけて立つてゐる。彼女の顔には、人がよく白痴を装ふ行者や神憑りの言ふことを聴きなながら、その世迷ひ言やぼそぼそ聲に何か格別な祕かな意味を推測するときに見せる、あの柔らかな甘たるい殊勝げな色が浮かんでゐる。私は妻の表情にも姿にも、何かしら精神病的な或ひは

修道院的なものがあるやうな気がし、古めかしい調度があり、籠のなかで眠つてゐる小鳥がゐ、ゼラニウムの匂ひがし、天井が低くて薄暗くて、そして熱いほど温かな彼女の部屋部屋は私に、尼院長の居間か、さもなければ信心に凝つた老將軍夫人の私室を思はせるのだつた。

私は客間にはいつた。妻は意外の色も當惑の色も見せずに、まるで私の來るのをちやんと知つてゐたやうに、險を含んだ平然とした眼附で私を見た。

「失禮」と私は物柔らかな口調でいつた、「これは有難い、イヴァン・イヴァーヌイチ、君はまだ居て呉れたね。實は階上で訊くのを忘れたんだが、ここの郡會長の名と父稱を君は知らないかね？」

「アンドレイ・スタニスラヴォーヴィチ。さう……」

「多謝」と私は言つて、ポケットから手帳を出して書きとめた。

沈黙が來た。そのあひだ妻とイヴァン・イヴァーヌイチは、多分私の出て行くのを待つてゐたのだらう。妻は、私が郡會長に用があることなどは信じてゐるなかつた。それは彼女の眼で分かつた。

「ぢや、お暇するとしませう、天人のお側を」とイヴァン・イヴァーヌイチは、私が客間を二度行き戻りして、やがて煖爐の傍に腰を下ろしたとき、さうぼそついた。

「いけません」と口早やにナターリヤ・ガヴリーロヴナは、彼の手に指を觸れて言つた、「もう十五分……お願いですわ。」

明かに彼女は、立會人なしで私と面と向ひ合はせて残るのが厭だと見える。

「なあに、十五分ぐらゐ待つて見せるさ」と私は考へた。

「や、雪だぞ！」私は立ち上がつて窓の外を見ながら言つた、「雪とは素晴らしいね。イヴァン・イヴァーヌイチ」と私は部屋を歩き廻りながら續けた、「僕は獵のできない自分がつくづく情ないよ。かうした雪の中を兎や狼を追つかける、さぞ愉快だらうなあ。」

妻は一ところに佇んだまま、首を廻さずに横目をつかつて、私の動作を追つてゐた。その顔附は、まるで私がポケットに、鋭利なナイフかピストルを匿してでもゐるやうだつた。

「イヴァン・イヴァーヌイチ、僕を是非ひとつ獵に連れてつて呉れないか」と私は物柔らかに續けた、「僕は實に實に感謝するがなあ。」

そのとき部屋へ客がはいつて來た。私の知らない四十恰好の紳士で、脊は高く、がつしりして、頭は禿げ、亞麻色の大きな髯と小さな眼をしてゐる。よれよれの袋みたいな服とその物腰とから、私は番僧か教員だらうと睨んだが、妻はその男をドクトル・ソーポリと紹介した。

「お近付きを得て、實に欣懷の至りです」と醫師はテノールの大聲で、私の手をぎゅつと握り、

悪氣のない笑顔を見せながら言つた、「欣懐の至りです。」

彼は卓に向つて席を占め、茶を一杯取つて、大聲で言つた。

「お宅にはラムかコニヤックのお持ち合はせはありませんかな？　ひとつ頼まれて下さい、オリヤ」と小間使に、「戸棚を覗いて見て下さらんか。ああ凍えさうだ。」

私はふたたび煖爐の傍に腰をおろし、皆の顔を見廻し、耳を傾け、そして時たま一座の話に何か一言口を入れた。妻は愛想のよい笑顔をお客達に見せる一方、まるで私が獣であるかのやうに監視の眼を放さなかつた。私の存在を煙たがつてゐる彼女の様子に、私はむらむらと嫉妬を覚え、腹立たしさを覚え、よし痛い目に逢はせてやれと片意地な慾望が湧いた。妻も、と私は心に思ふ、この居心地のいい部屋部屋も、この煖爐の傍の小さな場所も、みんな私のものなのだ、ずつと前

から私のものなのだ。だのに何かの拍子で、この呆けたイヴァン・イヴァーヌイチとかソーポリとかいふ手合ひが、それらに對して私以上の権利を持つてゐる。いま私は、窓からではなしにすぐ身近かに妻を、しかも老年期に入つた私の現在に缺けてゐるその環境の裡に見てゐる。そして彼女が私を憎悪してゐるにもかかはらず、曾て子供の頃に母親を慕ひ乳母を慕つたやうに、私は彼女を慕つてゐる。そして老境に入つた自分がいま、以前よりはもつと清らかな、もつと高い愛で彼女を愛してゐるのを、私は感じてゐる。だからこそ私は、彼女に歩み寄り、踵で爪先をぎゅ

つと踏んづけ、痛い目を見せて、そこでにやりと一笑してやりたいのだ。

「ムッシュウ・エノート*」と私は醫師に話しかけた、「この郡には幾つ病院がありますか。」

「ソーポリさんよ……」と妻が訂正した。

「二つです」とソーポリは答へた。

「ところで、病院一つ當り毎年どのくらゐ亡者が出ますかな。」

「パーヴェル・アンドレイチ、ちよつとお話がありますわ」と妻が私に言つた。

彼女は客達に失禮を詫びて、隣の部屋へはいつた。私は立ち上がつてそれに従つた。

「あなたは今直ぐお二階へお歸りになつて頂戴」と彼女は言つた。

「君は教養がないですなあ」と私は言つた。

「あなたは今直ぐお二階へお歸りになつて頂戴」と彼女は鋭く繰り返して、憎しみを籠めて私をまともに睨めつけた。

彼女はすぐ鼻先に立つてゐる。私がちよつと前へ屈んだら、私の髯が彼女の顔に觸れるに違ひない。

「だが一體何事かな」と私は言つた、「突嗟の間に私がいかなる悪事を働いたのかな。」

彼女は顔をびりびり顫はせたかと思ふと、急いで眼をぬぐひ、ちらつと姿見へ眸を走らせ、そ

して聲を殺して、

「また昔の幕がはじまるのね。あなたはとも出ていらしては下さいますまい。では御勝手になさいまし。あたくしが出て参ります、あなたは坐つてらつしやいまし。」

彼女はきつぱりした面持ちで、私は肩をすくめて冷笑を浮かべようと努めながら、二人は客間へ戻つた。そこにはもう新しい客が二人ゐた。どこかの老婦人と、眼鏡をかけた青年とである。

新顔と挨拶もせず、古顔と別れの言葉も交はさずに、私は自分の住居へ引き上げた。

妻

お茶のとき二階であつた出来事、つづいて階下での出来事のあとで、私にとつてはつきりして

来たことは、この二年のあひだに私達が漸く忘れかけてゐた私達の『結婚の幸福』が、何かの瑣細な馬鹿げた原因のためふたたび新たに始まらうとしてゐるといふこと、そして私にしる妻にしろもはや踏み留まることは出来ず、明日か明後日には、お互ひに憎悪が堰を切るのに追つかけて、私が過去数年の経験によつて判断し得る所によると、何かしら厭なことが持ち上がつて、私達の生活を根柢から覆すに違ひないといふことであつた。して見るとこの二年のあひだに——と私は、二階の部屋部屋を歩き廻りはじめながら心に思つた、私達は前より賢明にも、冷淡にも、平靜にもなつてゐないのだ。つまり、又もや涙だ、金切聲だ、呪詛だ、トランクだ、外國だ、つづいて彼女が外國で何處の馬の骨やら分からぬイタリヤ人かロシア人の伊達者と一緒に、私の顔に泥を

妻

塗るやうなことをしはしまいかといふ、片時も休まらぬ病的な恐怖だ、又もや旅券の拒絶だ、手紙の往復だ、絶對の孤獨だ、彼女への愛慕だ、そして五年もすれば、老年、白髪……。私は歩き廻りながら、あり得べからざる光景——益々美しく、肥つて来た彼女が、私の知らぬ男と抱擁してゐるところを、心に描いた。もう必らずさういふことになると思ひ込んでしまつた私は、では何故——と絶望的に自問するのだつた、では何故、久しい前からのあの度重なる夫婦喧嘩のうちの一つで、彼女を離縁してしまはなかつたらう、また何故そのとき彼女の方から、永遠に私を棄てて出て行つて呉れなかつたのだらう。さうなつてゐたなら、今頃はこんな未練も憎悪も苦勞もなく、私は平安に、仕事をし、何の思ひ煩ふこともなく、餘生を送つてゐたらうに。……

庭先へ角燈を二つつけた箱馬車はいつて来た。それから三頭立ての大きな櫓がはいつて来た。妻のところでは夜會があると見える。

十二時頃までは階下はしんとしてゐて、何の物音も聞こえて来なかつたが、十二時になると椅子を動かしはじめ、食器の音がしだした。つまり夜食だ。やがてまた椅子の引越しがはじまり、床の下が騒々しくなつて、皆でウラーを叫んだやうだつた。マリヤ・ゲラーシモヴナはもう床に入り、二階ちうに私のほかには人氣はなかつた。客間では、つまらぬ残忍な人間であつた先祖達の肖像が、壁の上から私を見下ろし、書齋では私のランプの反射が窓で厭らしい眼配せをしてゐ

た。そして私は、階下で行はれてゐることに羨望と嫉妬を感じながら、耳を澄まし、心に思ふのだつた、『この家の主人は私だ。その氣になれば、立ちどころにあの尊敬すべき連中を残らず追つ拂つてしまへるのだ』と。だが私はそれが馬鹿げた考へであることも、一人だつて追つ拂へはせぬことも、第一『主人』といふ言葉からして何の意味もないことも、知つてゐた。自分が主人だとしても、妻帯者だとしても、金持だとしても、侍従だとしても、思ひたいだけ思ふがいい。が同時に、それが何のことやら分かつたものぢやないのだ。

夜食ののち、階下では誰かしらテノールで歌ひはじめた。

妻 『そら見ろ、別に何にも起こりやしなかつたんだ』と私は自分に言ひ聽かせた、『何だつてかう興奮してゐるんだ。明日あれの所へ降りて行かぬことにする、それだけの話だ。それで私達の喧嘩もお仕舞ひだ。』

一時十五分過ぎに、私は寢室にはいつた。

「階下のお客さんはもう歸つたかね」と私は、服を脱がせて呉れるアレクセイに訊いた。

「左様でございます。皆様お歸りになりました。」

「だが何故ウラーをやつたのかね。」

「アレクセイ・ドミートリチ・マーホノフが、飢民救済のため麥粉一千プードとお金を一千ル

ブル密附なさいました。それからお名前は存じませんがさるお年を召した御婦人から、御自分の領地に百五十人分の食堂を設けられる旨お約束がありました。有難いことでございます。……ナターリヤ・ガヴリーロヴナは、皆様が毎週金曜日にお集まりになるやう決議をお出しになりました。」

「この階下ししたに集まるのか？」

妻 「左様でございます。お夜食の前に讀み上げられました一札に依りますと、八月から今日までにナターリヤ・ガヴリーロヴナは、穀類のほかに八千ルーブルほどお集めになりました由でございます。まことに有難いことです。……私は、閣下、かう考へますのですが、もし奥様が魂の救ひのお爲に御奔走遊ばしたら、それはどつさりお集めでございます。この方々は物持ちでございますから。」

アレクセイを退らせて、私は燈を消し、頭からすつぽりくるまつた。

『全くのところ、何を俺はかう氣を揉んでゐるんだ？』と私は思つた、『一體何の力がこの俺を、蛾が灯に牽きつけられるやうに、飢民の方へ牽くんだらう？ 現に俺は奴等を知りもせず、理解もせず、一度だつて見たこともなく、愛してもゐないぢやないか。ではこの焦躁はどこから來るのか。』

私は急に毛布の下で十字を切つた。

『だが何といふ女だ』と妻のことを考へて、私は自分に言つた、『俺に隠してこの家で委員會なんか開いてる。何だつて隠すんだ。何だつて陰謀を企らむんだ。俺が一體彼等に何をした。』

イヴァン・イヴァーヌイチの言つたことは本當だ。——俺は旅に出なけりやならん!

翌る日私は、一刻も早く發つたうといふ固い決心をもつて眼を覺ました。昨日の一部始終——お茶のときの會話、妻、ソーボリ、夜食、私を捉へた恐怖、それを思ふと私は切なくてならず、さうした物事を一々思ひ出させる環境から、間もなく脱け出せるのだと思ふと嬉しかつた。私が珈琲を飲んでゐると、管理人のヴラデーミル・プローホルイチが色んな件について長々と報告をした。最も愉快な件を彼は仕舞ひに取つて置いた。

「當家のライ麥を盗みましたる賊は見附かりまして御座います」と彼はにこにこして報告した、「昨日豫審判事がペストローヴォに於いて、三名の農夫を逮捕致しました。」

「あつちへ行つて貰はう」と私は呶鳴りつけ、怖ろしく腹が立つて、譯も謂はれもなしにビスケットの籠を擲んで床へ叩きつけた。

四

朝食のち私は手を擦りながら考へた。妻のところへ行つて、出發のことを告げなければならん。だが何のためだ。誰にそれが要る? 誰にも必要はない、と私は自分に答へた、しかし何故またそれを通告してはならぬのだ。ましてそれは彼女に、満足以外の何ものをも與へぬだらうぢやないか。そのうへ昨日の口争ひのあつた後で、一言も言はずに出て行くのは、あまり上分別とは言はれまい。彼女は私が怖氣づいたと思ふかも知れないし、自分が私を追ひ出したのだといふ考へのため、恐らく彼女は氣が咎めるであらう。また私が五千ルーブル寄附することを彼女に通告して置いてもいい譯だし、組織について二三の助言を與へ、かうした複雑な責任ある仕事に未経験な彼女のことだから、極めて悲惨な結果に陥る懼れのあることを、警告して置くのも悪くはあるまい。要するに私は妻の方へ牽きよせられたので、傍へ行くための色んな口實を考へてゐる一方では、是非さうするといふ固い信念が既に出來てゐたのである。

私が妻の所へ出かけた時は明るくて、まだランプがついてゐなかつた。彼女は客間と寢室とをつなぐ自分の仕事部屋に坐り、机にかがみ込んで、何やらしきりに書いてゐた。私を見ると彼女は身顫ひをして机を離れ、まるで私から書類を遮るやうな恰好で立ちどまつた。

「失敬、ちよつと一分ほど」と私は言ひ、どうした譯だか間誤ついた、「實はねナタリイ、ふとした事で耳に入つたんだが、君は飢民救濟を計畫してゐるんだつてね。」

「ええ、致してをりますわ。でもこれは私のことよ」と彼女は答へた。

「ああ、それは君のことさ」と私は物柔らかに言つた、「僕はそれを聞いて嬉しいんだよ、全く僕の考へと一致してゐるからね。で僕も加はらせて貰ひたいのだが。」

「失禮ですけど、あたくしそれはお断りいたします」と彼女は答へて外方そつはを向いた。

「何故かね、ナタリイ」と私は靜かに訊いた、「何故かね。僕も飽食の徒で、やはり飢民を助けたいと思ふんだが。」

妻 「一體どういふお心算ですの」と彼女は蔑むやうな薄笑ひを見せ、片方の肩をすくめて訊いた、「あなたには誰もお願ひしてをりませんわ。」

「君にだつて誰も頼んだ譯ぢやない。だのに君は、僕の家で委員會なんか開いたのだ」と私は言つた。

「あたくしは頼まれましたの。けどあなたには、誰一人ついぞお願ひしたものはありませんわ、本當よ。いらして、誰もあなたを知らない所で御援助をなさいまし。」

「お願ひだから、僕にさういふ物言ひはよして貰ひたいね。」

私は穩かにしようと力め、冷靜を失はぬやう一心籠めて自分に祈つた。初めのうちは妻の傍にゐるのが快よかつた。何かしら柔しい、主婦らしい、若やいだ、女らしい、非常に優美な氣分、

つまり私の二階にはもとより私の生活全體にあれ程缺けてゐる氣分が、吹いて來るのであつた。

妻は薔薇色のフランネルの部屋着を着てゐて、それが彼女をひどく若く見せ、その目まぐるしい、時としては烈しい動作に、柔か味を與へてゐた。嘗て一目みただけで私の胸を燃え立たせた彼女の美しい暗色の髪は、いま長い間うつ向いて坐つてゐたのでほつれて、亂れたさまを見せてゐたが、そのため私には一層房々と見事に見えるのであつた。だが凡てこんなことは俗悪なまで平凡なことだ。私の前に立つてゐるのは世間並みの恐らくは不纏綴で粗野な女なのだが、それが嘗ては私が一緒に暮らし、また彼女の不幸な性格さへなかつたなら今日なほ一緒に生活してゐたに違ひない、私の妻なのである。それはこの地上に私の愛したたつた一人の人間である。いま出發を前にして、もう窓からすら姿を見ることはあるまいことを覺ると、邪慳で冷淡で、横柄な蔑みの薄笑ひを浮かべて受け答へをする女であるにせよ、やつぱり彼女が蠱惑的に見え、誇らしく思はれ、この女から別れて行くことは私には怖ろしい、とても出來ないと心にさとのだつた。

妻 「パーヴェル・アンドレイチ」と暫く黙つてゐた彼女が言つた、「二年のあひだ私達はお互ひに邪魔をせずに、靜かに暮らしましたわね。それを何だつて急に、また元に歸らうとなさいませぬの？ 昨日あなたは、私に恥を搔かせ厭な思ひをさせにいらしたわね」と彼女は聲を高めて續けた。その顔は紅らみ、眼は憎惡に燃え立つた。「でもどうぞ御自制遊ばして、そんなことはなさ

らないで頂戴、パーヴェル・アンドレイチ。明日になったら私願書を出して、旅券を貰つて、出て行きますわ、行きますわ、行きますわ。修道院へ、寡婦の家へ、養育院へ……。」

「癲狂院へね！」と私は我慢しきれなくなつて叫んだ。

「ええ癲狂院へだつて！ その方がいいわ、いいわ！」と眼をきらきらさせながら、彼女は叫び立てた。「あたし今日ペストローヴォへ行つて、飢ゑて病氣になつた女達が羨ましくなりました。あの人達はあなたみたいなのと一緒に暮らしてはゐませんからね。あの人達は正直で自由だけど、私はあなたのお情で居候にして頂いて、のらくらして身を亡ぼし、あなたのパンを頂きあなたのお金を使ひ、そのお返しに私は自分の自由と、誰にも用のない妙な貞節とを捧げてゐるのですわ。あなたが旅券を下さらないお蔭で、私はありもしないあなたの御立派な名を守つてゐなければならぬのですわ。」

口を利用してはならなかつた。齒をくひしばつて、私は足早やに客間へ出て行つたが、すぐまた引き返して言つた。

「固く願ひして置くが、今後は僕の家をあんな集會や陰謀や密議室に使はないで貰ひたい。僕の家には僕の知人だけ出入りを許す。君のあの悪黨どもは、博愛がしたいならしないで、どこか他の場所を捜すがいいのだ。君のやうな氣の變な女を搾取しうる嬉しさのあまり、僕の家で毎

晩眞夜中にウラーを唱へる、そんなことを僕は許さん。」

妻は手をもみ搾り、まるで齒が痛みでもするやうな長い呻きを立てながら、眞蒼な顔で足早やに隅から隅へ歩いた。私は手を一振りして客間へ出て行つた。私は忿怒で息が詰まりさうだつた。それと同時に、自分が自制を失つて、何か一生の後悔のもとになるやうなことを爲たり言つたりしはしまいかといふ恐怖に戦いてゐた。そして自分を抑へようと思つて、しつかり手を握りしめてゐた。

水を飲み、やや落ちつくると、私は妻のところへ歸つた。彼女は書類を載せた机を私から遮るやうな元の姿勢で立つてゐた。冷やかな蒼ざめた彼女の顔を、しづかに涙が傳はつてゐた。私は少し黙つてゐたが、やがてもう忿怒を交へぬ悲痛な聲で彼女にいつた。

「君はどうしてさう僕が分からないのだ。どうしてさう僕を邪推するのだ。名譽にかけて誓ふ、僕は純な動機から、善をしたいといふ唯一つの希望から、君の所へ來たのだ。」

「パーヴェル・アンドレイチ」と彼女は胸に手を重ねて言つた。彼女の顔は、お仕置きをしないでと怯えて泣きながら哀訴する子供に見られる、あの惨めな縋るやうな表情になつた。「あなたがいやだと仰言ふことはよく存じてゐますけど、けれどやはり願ひしますわ。どうぞ我慢をなすつて、一生にせめて一度でも善い事をして下さいまし。願ひですから、此處を發つて頂

戴。あなたが飢民にお盡しになれるのは、これ一つきりですわ。發つて下さいまし。さうすれば何もかもすつかり許して差し上げますわ。」

「何もわざわざ僕の氣を悪くすることはないぢやないか、ナタリイ」と私は、急に一種特別な謙虚な氣持の湧くのを感じながら嘆息した、「僕はもう發つことに決めてゐるのだ。しかし、飢民のために何かしてやらないうちは、僕は發てない。それは、僕の義務だ。」

妻 「ああ」と彼女は低く言つて、いらだたしげに眉を寄せた、「あなたは鐵道や鐵橋なら立派にお作りになれますわ。けど飢民のために何ひとつだつてお出來になるものですか。これがお分かりにならなくちや駄目よ。」

「さうかね。君は昨日、僕が無關心だとか同情心がないとかいつて非難したつけね。君は何てよく僕を知つてゐるのだ」と薄笑ひをして、「君は神様を信じてるね。ぢやその神様が證人だ、僕が夜も日も氣を揉んでゐることのね……」

「私だつてあなたが氣を揉んでらつしやることは存じてをりますわ。けどそれには飢饉も同情も何の關はりもございませんわ。あなたが氣を揉んでらつしやるのは、飢民があなたのお世話にならずに濟み、郡會やその他一般の救濟者があなたの御指導を必要としてゐないからですわ。」
私は怒りを殺すために暫く口を噤んで、やがて言つた。

「僕は君に打ち合はせがあつて來たのだ。お掛けなさい。どうぞお掛けなさい。」
彼女は坐らなかつた。

「お掛けなさい、どうぞ」と私は繰り返して、椅子を示した。
彼女は坐つた。私も腰を下ろして、暫く考へてから言つた。

妻 「僕の言ふことを眞面目に聞いて貰ひたい。いいかね。……君は隣人愛に勵まされて、飢民救濟の組織を引受けたのだ。無論僕はそれに何の反對もしない。全く同感だし、二人の關係がどうあらうと凡ゆる協力をする覺悟だ。しかし君の智と情とに……情とに」と私は繰り返して、「對する僕の萬腔の敬意にも拘らず、僕は救濟事業の組織といふやうな困難複雑しかも責任の重い仕事だ、君一人の手にあることを許すわけには行かないのだ。君は女性だ、未経験で、世情にうとく、あまりにも信じ易く感激し易い。君は全然みず知らず同様の輔佐役連に圍まれてゐる。以上のやうな條件下にあつては、君の活動は否應なしに次の二つの結果を齎すといつても、誇大に失しはしまいと思ふ。第一にはこの郡は結局何の救濟も受けず仕舞ひであらうし、第二には君自身及び輔佐役達の過失によつて、君は自腹を切らなければならぬのみならず、自分の名譽をも投げださねばならぬ破目になるだらう。費消や放漫の責は假りに私が償ふとしても、誰が君に名譽を返して呉れるだらうか。監督不行届と放漫の結果として、君したがつては僕がこの事業で二十萬儲け

たなどと噂が立つた時、君の輔佐役連中は君を助けに来て呉れるかね。」
彼女は黙つてゐた。

「君が言ふやうに利己心からではなく」と私は言葉をつづけた、「單に飢民が救済を受けず仕舞ひになり、君が名譽を失ふといふやうな事がないために、僕は君の仕事に喙を容れることを自分の道徳上の義務と考へるのだ。」

「もつと簡單に仰言つて」と妻は言つた。

「どうかお願ひだから」と私は續けた、「今日までに君の手許に幾ら集まつたか、そして既に幾ら費つたか見せて呉れ給へ。それから現金なり物資なりの新規の受入れのある都度、また新規の支出のある都度に、毎日僕に報らせて貰ひたい。それから、ナタリイ、君の輔佐役達の名簿を僕に渡して貰ひたい。或ひは彼等は全く申分のない人達かも知れん。それを疑ふ譯ではないが、とにかく調査して見なけりやならんからね。」

彼女は無言だつた。私は椅子を立つて、部屋の中をぶらぶらした。

「さ、始めようぢやないか」と私は言つて彼女の机の前に坐つた。

「あなた、それは眞面目なお話なの？」と彼女は怪訝と驚愕の色を浮かべて、私を見ながら訊いた。

「ナタリイ、よく考へて見てお呉れ」と私は、異議を插まうとしてゐる彼女の顔色を読んで、頼むやうに言つた、「僕の經驗と人格とに充分信頼してお呉れ。」

「でもやつぱり私分かりませんわ、どうなさるお心算なのか。」

「君が今までに幾ら集め幾ら費つたか、それが見せて貰ひたいのだ。」

「私には祕密はありませんわ。誰が見ても構ひません。御覽遊ばせ。」

机の上には學校で使ふ筆記帖が五冊ばかりと、一ぱい字を書いた書簡箋が五六枚と、郡の地圖と、大小とりどりの紙片が一杯載つてゐた。黄昏になつて來た。私は蠟燭をつけた。

「御免、僕はまだ何にも見當らないんだがね」と私は帳面をめくりながら言つた、「寄附金の受入控はどこにあるの。」

「それは寄附申込書で分かりますわ。」

「そりやさうだが、控も作らなけりやいけなぢやないか」と私は彼女の無邪氣さに微笑みながら言つた、「現金なり物資なりの寄附に添へて來た手紙はどこだね。御免、ほんの實務上の注意なんだがね、ナタリイ、さういふ手紙は保存しなければいけないよ。一通ごとに番號をつけて、別の控に書き込んで置くのだ。君の出す手紙もやはり同じ様にするのだ。だが、それはみんな僕が自分でしよう。」

「ええ、ええ、どうぞして下さい……」と彼女は言った。

私は非常に自ら満足だつた。生きた興味のある仕事や、小さな机や、無邪氣な帳面や、妻の仲間になつてするこの仕事に約束して呉れる魅力やに夢中になつて、妻が私の邪魔をしまいか、何か飛んでもない氣紛れでも起こして萬事をひつくり返しはしまいかと、びくびくしてゐた。だから私は、彼女の唇がぴりぴり顫へてゐることに、まるで毘にかかつた小さな獣のやうに、怯えて途方に暮れたやうに四邊をきよろきよろ見てゐることに、何の意味も附すまいと努力しながら、先を急いだ。

妻

「そこでね、ナタリイ」と私は彼女の方を見ないで、「この書類やノオトを全部二階へ持つて行かして呉れないか。僕は眼を通し調べてみて、明日僕の意見を言はして貰はう。もう他には何か書類はないの？」と、私は帳面と紙片をまとめて重ねながら言った。

「持つていらして、みんな持つていらして！」と彼女は、書類をまとめる手傳ひをしながら言ひ、大粒の涙がその顔を傳はつた。「みんな持つていらして！これが私の生活に残つてゐるものの全部ですわ……。最後のものをお取り上げなさいまし。」

「ああ、ナタリイ、ナタリイ」と私は咎めるやうに歎息した。

彼女は何か矢鱈むしやに、肘を私の胸にぶついたり髪で私の顔を撫でたりしながら、机の抽

斗を抜き出して、私の眼の前の卓上へ書類を抛り出しはじめた。同時に小銭が私の膝や床に散らばつた。

「みんな持つていらして……」と彼女は噎れ聲で言ふのだつた。

書類を投げ切つてしまふと、彼女は私の傍を離れ、両手で頭を抱へて寝椅子に倒れ伏した。私は小銭を拾つて、それをもとの抽斗に入れ、召使に出來心を起こさせぬやうに鍵をかけた。それからありつたけの書類を両手に抱へて自分の住居へ向つた。妻の傍を通るとき私は立ちどまつて、その背中与戦いてゐる肩を眺めながら言った。

妻

「何て君はまだ赤ん坊なんだらうね、ナタリイ。やれやれ。ねえナタリイ、君がもしこの仕事がどんなに重大で責任の重いものかが分かつたら、眞先きに僕に感謝するだらうよ。請け合ひだとも。」

自分の部屋に歸ると、私はゆつくりと書類を調べにかかつた。帳面は綴ぢてもなければ、頁に番號も打つてはない。記帳が色んな手蹟で行はれてゐるところを見ると、誰でも勝手に帳面が扱へるのに違ひない。義捐物資の目録には、品物の價格が示してない。ところが考へて見給へ、今は一留十五哥のライ麥も、二月後には二留十五哥に騰るかも知れないではないか。どうしてこんな風にして置けよう。それから『ア・エム・ソーポリに三十二ルーブル渡す』とある。何時渡し

たのだ。何のために渡したのだ。支拂ひを證明する書類はどこにある？ 何にも無いし、何にも分かりはしない。裁判にでもなつたら、これらの書類はただ事件を不明瞭にするだけだらう。

「何て無邪氣な女だらう」と私は呆れ返つた、「何てまだ赤ん坊なんだらう！」

私は腹立たしくもあり可笑しくもあつた。

五

妻

妻は既に八千集めてゐたから、これに私の五千を加へれば、都合一萬三千になる。手始めとしては非常に具合がいい。私があればほど關心し氣を揉んだ仕事も、遂に私の手中に歸した。私は他人がしようともせず出来もしなかつた仕事をやり、自分の義務を果たすのだ。飢民のための正しい眞劍な救済を組織するのだ。

打ち見るところ、何もかも私の目論見通り希望通りに運んでゐるらしい。だがこの不安な氣持が去らないのは、一體どうしたことだらう。私は四時間がかりで妻の書類を點檢し、その意味を判じ、誤りを正した。が、それで心が安まるどころか、私は自分の背後に誰か他人が立つて、ざらざらした掌で私の背中を撫でてゐるやうな氣がするのだつた。私に何が不足なのであらうか。救済の組織は信賴できる人の手に落ち、飢民は飢ゑを満たすであらう。そのうへ何が要るのか？

樂な四時間の仕事はどうした譯か私を心から疲らせ、私は屈み込んで坐つてゐることも書くことも出来なかつた。階下からは時々鈍い呻き聲が傳はつて來た。妻の咽び泣きだ。いつも從順しい睡さうな殊勝顔の從僕アレクセイが、しよつちう蠟燭の蕊を直しに卓に寄つて來て、何やら不思議さうに私を見つめた。

「いいや、發たなくちやならん！」と私は到頭、精根盡きて決心した、「この有難い印象から少しでも遠い所へ。明日こそ發たう。」

妻

私は書類と帳面をまとめて妻の所へ歩を運んだ。はげしい疲労と困憊を感じ、書類と帳面を兩手で胸に壓しつけて、寢室を通り抜けながら自分のトランクが眼についた拍子に、床の下から泣聲が聞こえた。……

『君は侍従だつてね』と誰かが耳許で訊いた、『欣懷の至りだ。だがやつぱり君は卑劣漢だよ。』
「みんな馬鹿げたことだ、馬鹿げたことだ……」と私は階段を降りながら呟いた、「何を馬鹿な。……俺が利己心と名譽心に操られてゐるなんてことも、馬鹿げた話さ。……何といふ下らんことばかりだ！ 一體飢民を救つたからといつて勳章でも呉れるといふのか、それとも俺を局長にでもして呉れるといふのか。馬鹿な、馬鹿な。それにこの田舎で、一體誰に名譽を誇るのだ？」

私は疲れた、とても疲れてゐた。そして何者かが耳に囁いた、『欣懐の至りだ。だがやつぱり君は卑劣漢だよ。』どうした譯か私は、幼いころ知つてゐた或る古い詩の一行を思ひだした、『善人たることの何ぞ樂しき。』

妻は寢椅子に、さつきの姿勢のまま——俯伏せに両手で頭を抱へて、横になつてゐた。そして泣いてゐた。傍には小間使が立つて、怯え切つた途方に暮れた顔をしてゐる。私は小間使を退らせて、書類を机に重ね、暫く思案してから言つた。

妻 「さ、君の書類をここに置くよ、ナタリイ。萬事いいよ、萬事上出来だ、僕も非常に満足だ。明日僕は發ちます。」

彼女は泣きつづけてゐた。私は客間へ出て、その暗がりに腰を下ろした。妻の嘸り泣きや溜息が何やら氣に咎めてならず、自分を辯護するため私は二人の争ひの一部始終を、相談の席に妻を招ぼうといふ不幸な考へが浮かんだことから、帳面やこの嗚咽に至るまで思ひ返して見た。それは結婚後たびたびあつた、われわれ夫婦の憎惡の醜い無意味なおきまりの發作なのだが、さてそれが飢民に何の關はりがあるか。一體何だつて、飢民達が二人の争ひの種になつたのだらう。まるで私達は追つ駈けつこをしながら、知らぬ間に祭壇へ駈け込んで、摺み合ひをはじめたやうなものではないか。

「ナタリイ」と私は靜かに客間から言ふ、「もういい、もういいよ。」

泣くのをやめさせ、この遣りきれない状態の終を附けるには、妻のところへ行つて慰めるか、あやすか、詫まるかしなければならぬ。だが彼女に私の言ふことを信じさせるには、どうしたらいいのか。捕へられて私を憎んでゐる野鴨に、私は彼が大好きで彼の苦しみに同情してゐるなどと、どうして納得させることが出来ようか。自分の妻とはいへ、どんな女なのか私は知らず仕舞ひなのだし、従つて彼女にどんなことをどう話せばいいのかつぞ知らないのだ。彼女の表面だけなら私はよく知つてゐる、その美質に相應した尊敬を拂つてゐるが、魂の世界、徳性の世界、考へ方、人生觀、めまぐるしい氣分の變化、憎惡の眸、高慢さ、時として私を驚嘆させる博學さ、また例へば昨日みたいなの尼僧のやうな顔附といった方面になると、私にはさつぱり馴染がなく見當がつかぬのだ。彼女と衝突するたびに私は、これは一體どういふ人間なのか定義しようと掛かるのだつたが、私の心理學ではたかだか、無分別で浮はつた女で、不幸な性格と女の論理の持主といふ定義を出なかつたし、私にはそれで結構十分な氣がしてゐた。だがいま彼女が泣いてゐるうちに、私はもつとよく知りたいといふ燃えるやうな願ひを覺えるのだつた。

泣き聲がやんだ。私は妻の所へ行つた。彼女は両手で頭を支へて寢椅子に腰を掛け、思ひ沈んでぢつと燈を見てゐた。

「僕は明日の朝發つことにしたよ」と私は言った。

彼女は無言だった。私は部屋を暫く歩き、やがて溜息を吐いて言った。

「ナタリイ、君が僕に發つて呉れと言つたとき、さうすれば何もかもすつかり許して差し上げる……と言つたつけね。つまり君は、僕が君に悪いことをしたと思つてゐるのだね。ぢや頼まう、冷靜にしかも手短かに、僕が君にした悪いことを明示して呉れないか。」

「私疲れきつてゐますの。あとで何時か……」と妻は言った。

妻
「どんな悪いことかね」と私は續けた。「僕が何をしたね。君は若くて美しくて生活を意欲してゐるのに、僕は君の二倍も年上で君の嫌惡をそそる、と言ふのかね。だが一體それが罪だらうかしら。僕は何も強制的に君と結婚したのではない。いいぢやないか、自由な生活がしたいならしたいで、出て行けばいいのさ。僕は自由を上げるよ。出て行つて、誰なりと好きな人を愛し給へ。……離婚だつてして上げるさ。」

「そんなことをして頂きたくはないの」と彼女は言つた。「あなただつて御存知でせう、私は前にはあなたを愛してゐて、いつも自分の方が年上のやうに思つてゐましたわ。そんなことは皆つまらないことですわ。……あなたの悪いのは、あなたが年寄りで私が若いことや、自由になつたら私がほかの男と戀ができるなどと云ふことぢやなくて、あなたが難しい方で、エゴイストで、

人間嫌ひだからですわ。」

「よくは知らないが、さうかも知れん」と私は口籠もつた。

「あちらへいらして下さいまし。あなたは夜明けまで私をお苛めになるお心算でせうけど、お断り申し上げて置きますわ、私もうぐつたりしてしまつてお返事は致せませんのよ。あなたは發つとお約束なさいましたわね。私厚く御禮を申し上げますわ。それ以上何にも要りませんの。」

妻
妻は向ふへ行つて呉れと言ふが、私には容易にそれが出来なかつた。私は氣力が衰へて、自分のがらんとした、居心地の悪い、厭氣のさした部屋部屋が空怖ろしいのだつた。子供のころ何處かが痛む時には、母か乳母にしがみついて、温かい着物の襷に顔を隠しながら、痛みから隠れてゐるやうな氣がしたものだつた。今もそれと同じで、何故かしらこの小部屋の妻の傍でなければ、自分の不安な氣持から隠れることは出来ぬやうな氣がした。私は腰を下ろして、片手で明りを遮つた。しんとしてゐた。

「どんな悪いことをですつて」と妻が長い沈黙のあとで、涙のきらきらする眞赤な眼で私を見ながら言つた。「あなたは御立派な教養も教育もおありで、とても潔白で眞直ぐで、ちゃんとした主義をお持ちですけど、それがみんな、何處でもあなたの被入るところへは、所嫌はず一種むつとする空氣や壓迫の感じや、何かしらとても人の氣を悪くするやうな、見下げるやうなものを、

持つていらつしやる結果になるのですわ。あなたは御自分の立派な考へ方がおありなので、世の中の何もかもがお嫌ひなのですわ。信仰は未開と無知の現はれだといふので信者もお嫌ひ、かと思ふと信仰も理想もないからといつて不信仰者もお嫌ひですし、舊弊で保守主義だといつて老人もお嫌ひ、自由思想だといつて若い人もお嫌ひですね。あなたは國民とロシヤの利害を尊重していらつしやるもので、誰を見ても泥棒や追剝に見えて、國民がお嫌ひですね。あなたは誰も彼もお嫌ひなのですわ。あなたは眞直ぐな方でいつも法律に即しておいでなもので、しよつちうお百姓や近所の人を相手に裁判を起こしていらつしやる。ライ麥を二十俵盗まれたといつて、秩序の好きなあなたは、百姓達のことを知事とありつたけのお役所にお訴へになる、かと思ふと此處のお役所のことをベテルブルグにお訴へになるのです。法律に即してね！」と妻は言つて笑ひだした、「法律に基き道德の名に於いて、あなたは私に旅券を下さらない。かういふ道德と法律があると見えますわね、若い健康な自尊心のある女性は、宜しく生涯を無爲と憂愁と絶えざる恐怖のうちを送り、代償としてその愛せざる男より、食事と住居とを受くべし。あなたはとてもよく法律に通じていらして、本當に潔白な眞直ぐな方で、結婚を重んじ家庭の意義を重んじておいでです。ところがその結果はどうでせう、生まれてこの方ただの一遍だつて善いことはなさらず、皆に嫌はれ、皆と争ひ、結婚以來七年のうちに、七月と妻と一緒に暮らしてはないぢやありませんか。あなたには妻はなく、私には夫がなかつたのですわ。あなたのやうな方とは一緒に暮らせませんわ、とても遣り切れませんわ。はじめの何年かはあなたと一緒にゐるのが恐かつたのですけど、今ぢや私恥かしいのですわ。……さうして女盛りを無駄にしてみましたわ。あなたと闘つてゐるうちに、私は自分の性格を臺無しにして、刺々した、がさつな、おどおどした疑深い女になつてしまいました。……ええ、今さら言つても始まらない。さ、お分かりになりたくて？ 御自分のお部屋へいらつしやいませ。」

妻は寢椅子に凭れて思ひに沈んだ。

「本當にどんな美しい羨ましいほどの生活だつて出来たのに」と彼女は物思はしげに燈を見つめながら、小聲で言つた、「どんな生活だつて！ でももう返らぬことだわ。」

冬を田舎で過ごした人、そして餘りの退屈さに犬さへ吠えず、時計までが時を刻むのに飽きて思ひ悩んでゐるかに見えるあの長い物憂い静かな宵を知り、さうした宵にふとめざめた良心の聲に愕然として、その聲を或ひは黙らせ或ひは判じようと、落ちつかぬ氣持で其處かしこを歩み廻つたことのある人なら、この小さな居心地のいい部屋にひびきながら、私がやくざ者だと告げてゐる女の聲が、どんなに私の慰めになり楽しみになつたかがお分かりであらう。私には自分の良心が何を欲してゐるかが分からずにゐたのに、妻はその翻譯者として、女の言葉ではあるものの

はつきりと、私の胸騒ぎの意味を説き明かして呉れたのだ。それまでも、烈しい不安の募るたびに、その一切の秘密は飢民にはなく、私がかくあるべき人間でない事にあるのだと、ひそかに思ひ當つたことも幾度か知れなかつたのだ。

妻はやつとのもので起ち上がつて、私に歩み寄つた。

「パーヴェル・アンドレイチ」と彼女は悲しげな微笑みを見せて言つた、「御免なさいね、でも私どうもお言葉が信じられませんの。あなたはお發ちにならないのぢやなくて？　でも、もう一度お願い致しますわ。これを」と自分の書類を指さして、「自己欺瞞とでも、女の論理とでも、誤ちとでも、何とでもお呼びになるのは御勝手ですけど、邪魔はなさらないで下さいましね。これが私の生活に残つてゐるものの全部ですもの。」彼女は横を向いて暫く黙つてゐた。「今まで私には何にもありませんでした。自分の若さは、あなたとの闘ひで使つてしまひました。今やつとこれに縋りついて、生き返つたやうな幸福な氣持ですの。……やつと自分の生活の言譯が見附かつたやうな氣がしますの。」

「ナタリイ、君は思想のある立派な婦人だ」と私はうつとりと妻を見ながら言つた、「君の爲すこと言ふこと、みんな素晴らしい、みんな聰明だ。」

自分の感動をかくすため、私は部屋をひと歩きした。

「ナタリイ」と私は一分ほどしてから言葉をついだ、「ここを發つ前に、特別のお慈悲でもつて、ひとつ僕が何かしら飢民に盡せるやうに力を藉して呉れないかね。」

「まあ、私に何ができませんう」と妻は肩をすくめた、「この寄附申込書のほかには。」

彼女は自分の書類を引掻き廻して、申込書を捜し出した。

「幾らでも寄附遊ばせな」と彼女は言つたが、その言ひ振りには、寄附申込書に眞面目な意味を與へてゐない氣配が見て取れた、「ほかには別に、あなたがこの仕事にお加はりになる途はありませんわ。」

妻

私は申込書を手にとつて、『無名氏、五〇〇〇』と書いた。

この『無名氏』といふのには、何だか良くない、まやかしの、自惚れたものがあつた。がそれをやつと覺つたのは、妻がひどく眞赤になつて、急いで申込書を書類の間へ押し込んだのを見た時だつた。二人とも恥かしくなつた。私はどうあつても是非いま直ぐこの氣拙さを消してしまはねばならぬ、でないとなつて汽車の中でも、ペテルブルグでも氣恥かしい思ひをしなければなるまいと感じた。だがどうして消したのか。何を言へばよいのか。

「僕は君の事業を祝福するよ、ナタリイ」と私は誠意を籠めて言つた、「そして君の凡ゆる成功を祈る。が、お別れに臨んで一言忠告を許して貰ひたい。ナタリイ、君はソーポリはじめ君の輔

佐役連中に、もつと注意深くやり給へよ、彼等に氣を許してはいけないよ。彼等が正直でないとは僕は言はんが、彼等は士族ではない、思想もなく、理想も信仰もなく、生活の目的もなく、確たる主義もない連中だ。あの連中の本来はただ金にあるのだ。金、金、また金さ！」私は嘆息して、「あの連中は手間も金もかからぬ穀物を好む。そしてこの點に於いては、彼等に教育があればあるほど、事業にとつては危険だ。」

妻は寢椅子へ行つて半身を凭せた。

「思想、思想的」と彼女は、懶さうな氣乗りのせぬ聲を出した、「思想性、理想、生活の目的、主義……。かうした言葉をあなたは、人を見下げるか辱しめるか氣を悪くさせるかしようとなさる時、きつと仰言いましたわね。本當にあなたは何といふ方でせう。さういふ見方と人に對する態度とを持つていらつしやるあなたを、假にこの仕事の傍へお寄せしたら、一日目に仕事はがらへ行つてしまひますわ。それがお分かりになつてもいい時よ。」

彼女は溜息をついて暫く口を噤んだ。

「それはがさつな性格といふものですわ、パーヴェル・アンドレイチ」と彼女は言ひついで、「あなたは教養も教育もおありですけど、底の底は何といふまだ……スキタイ人*でせう。それはあなたが閉ぢ籠もつて人間嫌ひな生活をなすつて、誰にも會はずに、御専門の技術の本の他は

何一つお讀みにならない所爲ですわ。けど本當は、いい人だつていい本だつてありますのよ。さうですわ。……でも私疲れ切つてしまつて、口を利くのが辛い。もう寝まなくては。」

「ぢや僕は發つからね、ナタリイ」と私は言つた。

「ええ、ええ、……有難う……」

私は暫く佇んでゐたが、やがて二階へ歸つた。一時間ののち——それは一時半だつたが、私は蠟燭を手に下へ降りて行つた。妻と話がしたかつたのだ。何を言ふつもりか自分でも知らなかつたが、何かしら大切な是非とも言つて置かなければならぬことがあるやうな氣がした。仕事部屋には彼女はゐなかつた。寢室へ導く扉は閉まつてゐた。

「ナタリイ、もう寢たかい」と私は小聲で訊いて見た。

返事はなかつた。私は暫く扉口に佇んでゐたが、やがて溜息をつくと客間へ行つた。その長椅子に腰を下ろして、蠟燭を消し、暗がりの中に夜が明けるまで坐りつづけた。

六

朝の十時に私は停車場へ向つた。凍てついてはゐなかつたが、空からは水氣の多い牡丹雪が降りしきつて、氣持の悪い濕つばい風が吹いてゐた。

池を過ぎ、やがて白樺の林を過ぎ、私の家の窓から見えるあの坂道を登りはじめた。私は自分の家を見納めに見て置かうと振り返つたが、雪にとざされて何も見えなかつた。暫くすると前方に、恰も霧の中のやうにぼんやりと農舎の群落が見えて来た。これがペストローヴォだ。

『もしいつか俺が氣違ひになつたら、それはペストローヴォのせゐだ』と私は思つた、『あの村にあとを跟けられてゐるのだ。』

村の往還に出た。農舎の屋根はみんな無事で、剝がされたのなどは一つもない。つまり私の管理人が嘘をついたのだ。男の子が手籠に、赤ん坊を抱いた女の子を乗せて行く。また三歳ほどの男の子が、百姓女みたいに頭をくるまれて、親指だけ分かれた大きな手袋をして、舞ひかかる雪片を舌で捕へようとして笑つてゐる。そこへ向ふから粗朶を積んだ車が来る。その傍に百姓がついてゐる。白髪なのか、鬚が雪で眞白なのかどうしても分からない。彼は私の馭者と顔馴染だとも見え、笑顔を見せて何か話しかける。私には機械的に帽子をとつて見せる。犬が二三匹構への中から駈け出して、珍らしさうに私の馬を見る。すべては静かで、普段のまま、當り前である。移住民が引返して来て、パンが無く、農舎の中では『或ひは高笑ひし或ひは壁に攀ぢ』てゐるといふ。だがこの普通の様子を見ては、本當にそんなことがあつたとは信じられぬ。途方に暮れた顔もなく、救ひを叫び求める聲もなく、泣聲もなく、罵る聲もない。あたりは總べて静寂、

生活の秩序、子供ら、手籠、そして尻尾を卷いた犬があるばかり。子供にもすれ違つた百姓にも不安の色はないのに、一體なぜ私はこんな不安なのだらう。

百姓の笑顔を眺め、大きな手袋をした男の子を眺め、農舎を眺め、自分の妻のことを思ひ出しながら、今やつと私は、この人々を征服できるやうなそんな困窮はないことを覺るのだつた。空氣の中にもう勝利の氣が漂つてゐるやうな氣がし、私は誇らしい氣持になつて、私も彼等と一緒にだと呼ぼうとした。しかし馬はもう村を出て野道にかかり、雪が舞ひ風が呻きはじめ、私は私の想念とともに一人ぼつちになつた。社會事業を成し遂げた何百萬の人の群から、人生の手が私を、無用で無能な悪人として弾き出したのだ。私は邪魔者だ、民衆の困窮の一分子だ、私は征服され、弾き出されて、停車場へ急ぐのだ。ここを發つてペテルブルグの、ポリシャヤ・モルスカーヤ街のホテルに身を隠すため。

一時間後には停車場に着いた。番號札をつけた番人と馭者とで、私のトランクを婦人待合室へ運び込んだ。馭者のニカノールは外套の裾を端折つて帶革にはさみ、氈フェルトの長靴をはいて、全身雪でぐしよ濡れだつたが、私の發つのを喜んで、人懐こい笑顔を見せて言つた。

「では道中御無事に、閣下。よい時をお過ごしなさりませ。」
序でに言はして頂くが、私のことを皆が閣下と呼ぶけれど、その實私はただの六等官の年少侍カンメル・ユン

從に過ぎない。番人が汽車はまだ前の驛を出ないと言ふ。待たなければならぬ。私は外へ出た。前夜一睡もしなかつたお蔭で頭が重く、疲れ切つてやつと足を運びながら、何のめあてもなく揚水所の方へ行つた。あたりに人氣はなかつた。

「なぜ俺は行くのだ」と私は自分に訊いた、「一體向ふで待つてゐるものは何だ。もう私の方から離れてしまつた知人達、孤獨、レストランの食事、騒音、眼が痛くなる電燈……。何處へ何のために俺は行くのだ。なぜ俺は行くのだ。」

それに、妻と話をせずには發つのも何だか變だつた。私は妻を行方不明のまま残して來たやうな氣がした。發つとなれば彼女に、彼女の言ふ通りであること、私は本當に悪い人間であることを、言つて置くべきではないか。

私が揚水所から眼を轉じたとき、表口に驛長の姿が現はれた。この男のことを私はもう二度も、その長官に訴へたことがある。フロックの襟を立て、風と雪で縮み上がつて、彼は私の方へ歩いて來て、帽子の庇に指を二本上げ、當惑げな怨めしさうな顔に緊張した敬意を浮かべて、汽車は二十分延着しますが、そのあひだ暖かい屋内でお待ちになつてはと言つた。

「有難う」と私は答へた、「しかし多分僕は發ちますまい。私の馭者に暫く待つやうに言はせて頂けませんか。もう少し考へてみます。」

私はプラットフォームをぶらぶらしながら、發つたものかどうか思案した。汽車が來たとき、私は行くまいと決心した。家で私を待つものは、妻の困惑と、それに恐らくは妻の嘲笑と、陰鬱な二階と、私の落ちつかぬ氣持とであらう。しかしそれにせよ、私の年配になると、二晝夜も他人の間に坐つてペテルブルグへ行き、着いたあとでは一分毎に、私の生活が誰の用にも何の役にも立たず、終りに近づきつつあることを意識する——それに比べれば兎にかく氣が樂であり、何となく親しみがもてるのだ。いや、たとへ何事があらうと矢張り歸つた方がいい。……私は停車場を出た。あんなに家内ぢうで私の出發を喜んだ家へ、晝日なか歸つて行くのは具合が悪かつた。日が暮れるまでの時間の残りを、誰か近所の人のところで過ごすのもよからう。だが誰にしようか。或る人達とは險惡な間柄だつたし、或る者とは全く馴染がなかつた。私は考へて、イヴァン・イヴァーヌイチのことを思ひ出した。

「ブラーギンの所へやつて呉れ」と私は櫓に乗つて馭者に言つた。

「遠がすな」とニコノールは溜息をして、「二十八露里はありますぜ、それとも三十もあるか。」

「そこを頼むよ、いい子だ」と私は、まるでニコノールに拒絶する権利がありでもするやうな聲を出した、「やつて呉れ、頼むよ。」

ニコノールは疑はしげに頭を振つて、本當は轅にチェルケースぢやなくムジークかチージク★

を付けるんだつたと、のろくさ呟きながら、私の決心を跳すのを待つやうに、煮え切らぬ様子で手袋に手綱を握り、中腰になつて思案してゐたが、やがてやつと鞭をひと振りした。

『矛盾だらけな行爲の連続だな……』と私は雪から顔を隠しながら考へた、『俺は氣が狂つたのだ。まあいいさ……』

とあるとても高い峻しい坂道の上に出たとき、ニコノールは坂の中途までは用心深く馬を降ろして来たが、中途からいきなり馬が駆け出して、怖ろしいほどの速力で奔り下つた。彼は顫へ上がつて、兩肘を突張り、狂氣したやうな蠻聲を上げた。私はついぞそれまでに彼がそんな聲を出すところを見たことがなかつた。

「えーい、大將様がお乗りだぞお！ 手前らが息切らしたら、新馬買つて呉れるとよお。やい氣を付ける、轢いちまふぞ！」

異常な速力のため息が詰まりさうな今になつて、やつと私は馭者がひどく酔拂つてゐることに氣がついた。停車場で一杯やつたに違ひない。谷底に下りたところで氷が音を立てて爆け、肥の滲みた堅い雪のかけらが道から跳ね飛んで、びしりと私の顔を打つた。ひた奔る馬は餘勢を驅つて、上りも下りに劣らぬ疾さで駆けあがる。で私は、トロイカがもう平地に出て老いた樅林に入り、その見上げるやうな樅が四方八方から白い毛だらけの猿臂を私めがけて伸ばしてゐると、ニコ

カノールに叫びかける餘裕がなかつた。

『俺は氣ちがひ、馭者は酔拂ひ……』と私は思つた、『よからう！』

イヴァン・イヴァーヌイチは在宅だつた。彼は笑ひに噎せて咳き入り、頭を私の胸におしつけ、私の顔さへ見れば言ふ例の文句をやり出した。

「だが君は益々若返るなあ。全體どんな染毛劑でその髪や髯を染めるのかね、僕にも呉れりやいいに。」

妻 「僕はね、イヴァン・イヴァーヌイチ、訪問を返しに来たんだよ」と私は嘘をついた、「まあ怒らんで呉れ給へ。僕は都會兒なりに偏見があつてね、訪問を返さんとどうも氣が濟まんだ。」

「よく来て呉れたな君。僕はもう耄碌しちまつて、光榮が好きになつたよ。……さう。」
彼の聲音や幸福さうな笑顔で、私の訪問がひどく彼を嬉しがらせたことが分かつた。控室で百姓女が二人がかりで毛皮外套を脱がせて呉れ、それを赤シャツの百姓が釘にかけた。私がイヴァン・イヴァーヌイチと一緒に彼の小さな書齋へはいると、跣足の小娘が二人床ゆかに坐つて繪本を見てゐた。私達を見ると跳びあがつて駆けだして行つたが、すぐ入れ代りに眼鏡をかけた脊の高い瘦せた老婆がはいつて来て、落ちつき拂つて私にお辭儀をし、長椅子ソファにあつた枕と床ゆかの上の繪本を拾つて出て行つた。隣の部屋部屋からは、絶え間なしにひそひそ聲と跣足でぺたぺた歩く音が

した。

「家へドクトルが晝飯に来る筈でね、待つてるところさ」とイヴァン、イヴァーヌイチが言つた。「救護所からこつちへ廻る約束だ。さう。毎週水曜には僕の所で晝飯をやるんでね、神よ彼に健康を與へたまへ。」彼は身を伸ばして私の頸に接吻した。「來て呉れたからには、なあ君、つまり怒つちやゐない譯だね」と彼は鼻息を立てながら囁いた、「怒るもんぢやないよ、なあ小母さん。さうとも。腹の立つこともあるかも知れん、だが怒るもんぢやないよ。僕は死ぬ前にただこれだけを神様に祈るのさ、萬人と平和に仲好く眞實に暮らせ給へとね。さう。」

「失禮だけど、イヴァン・イヴァーヌイチ、椅子に脚を載せさせて貰ふよ」と私は、困憊のあまり自分を持って扱ひきれぬ氣持で言ひ、長椅子に深く掛けて兩脚を肘掛椅子へ伸ばした。雪と風に曝されたお蔭で私は顔がかつかと火照り、全身が熱を持つてゐるやうな氣がして、そのため益々ぐつたりとなつた。「君の所はいいな」と私は言葉をつづけた、「温かで、柔かくつて、居心地がよくつて……それに驚ペンもある」と書き卓の上に眼をやつて笑ひだした、「砂壺*も……」

「ええ？ さう、さう。……あの書き卓と、それからあの桃花心木の戸棚は、ジュコーフ將軍の農奴だつた素人指物師のグレーブ・ブトイガが、親命のために作つて呉れたものでね。さう……その道にかけちや中々の名人だつたよ。」

だるさうに、うとうとしかけた人みたいな調子で、彼は差物師ブトイガのことを物語りはじめた。私は謹聽した。それからイヴァン・イヴァーヌイチは次の間へ立つて行つた。美麗さと安直さによつて驚嘆すべき、花梨の箆筒を見せるためである。彼は指さきで箆筒を叩いてみせ、それから私の注意を、今どき何處へ行つても見られぬ筈の陶瓦張りの繪模様のある煖爐へ向けさせた。煖爐も指で叩いてみせた。箆筒からも、陶瓦張りの煖爐からも、肘掛椅子からも、晝布へ毛糸と絹糸で縫ひとつて、嚴丈なみつともない額縁に嵌めた繪からも、心善い飽食の息吹きがした。さうした物がみんな、私がまだ幼いころ、母親に連れられて此の家へ『名の日の祝ひ』に招ばれて來た時にも、やはり同じ場所に同じ並べ方で置いてあつたことを思ひ出すと、何日かの昔それらが存在しない時代があつたなどとは、どうしても思へないのである。

私は思ふのだつた、ブトイガと私の間には何といふ怖ろしい差違があることだらうと。ブトイガは何よりもまづ永持ちと堅實さを心がけて物を作り、それを第一義とし、人間の永生に一種特別な意味を附し、死といふことは考へず、恐らく死の可能などは碌に信じてゐなかつたらう。ところが私は、自分で鐵橋や石の橋を架けたときにも、それが何千年と存續するであらうにも拘らず、『これは永遠のものぢやない。……こんなものは何の役にも立たない』といふ考へを離れられなかつた。もしいまに誰か俊敏な美術史家の眼に、ブトイガの戸棚と私の橋がとまるやうなこ

とがあつたら、彼はかう言ふにちがひない、『この二人はそれぞれ注目すべき種類の人間である。即ちブトイガは人間を愛し、人間が死に亡びるといふ考へを容れず、従つてその家具を作るに當つては不滅の人間をめあてにした。一方技師アソーリンは人間をも生活をも愛さず、創造の幸福なる瞬間にあつてすら、死、滅亡、有限性の觀念を排しえなかつた。だから見給へ、彼のこれらの線の如何にみすばらしく、局限され、臆病で、みじめであるかを。』……

「僕はこの邊の部屋にしか火を焚かないのでね」とイヴァン・イヴァーヌイチは、自分の使つてゐる部屋を見せながら呟いた、「女房が死に伴が戦死してからは、表の方の間は閉めてしまつたのだよ。さう。……そらね……」

彼は一枚の扉を開けた。そして私は、四本の圓柱のある大きな部屋と、古いピアノと、床の上の豌豆の堆ぐまとを見た。寒氣と濕氣の臭ひがした。

「次の間には庭のベンチが納つてある……」とイヴァン・イヴァーヌイチが呟いた、「もう誰もマズルカを踊るものがないのでね。閉めちまつた。」

音がした。……ドクトル・ソーボリが來たのだ。彼が寒いので手を擦つたり、濡れた髻を撫でつけたりしてゐる間に、私は第一に彼が非常に退屈な生活をしてゐ、そのためイヴァン・イヴァーヌイチや私に會ふのが嬉しいのであること、第二に彼がお人好しの純朴な男であることを見て

取つた。彼が私を眺める眼附によると、私が彼に會ふのをとても嬉しがり、彼のことに非常な興味を持つてゐるとでも思つてゐるらしい。

「二晩寝なかつたです」と彼は朴訥な眼附で私を眺め、櫛の手を休めずに言つた、「一晩は産婦のおもりでね、もう一晩は夜通し南京蟲に責められてね、百姓の所に泊つたんです。だからもう、魔王サタンみたいに睡いんですよ。」

それが私に満足以外の何ものをも與へないに極まつてゐるといつた顔附で、彼は私の腕を抱へて、食堂へ連れて行つた。

妻

彼の純朴な眼附、よれよれのフロック、安物のネクタイ、ヨードフォームの臭ひ——それらは私に不愉快な印象を與へた。これは悪い仲間にはいつたなと感じた。食卓に就くと、彼はヴォトカを注いで呉れ、私は情ない微笑とともに飲みほした。彼は私の皿にハムを一片とつて呉れ、私は謹んで食べた。

「反覆レベチア・エス・マテルス・ツチオルムは學習の母なり★」とソーボリは、二杯目をいそいで飲みほしながら、「まるで嘘みたいな話ですが、立派な方々に御眼にかかれた嬉しさに、睡氣も醒めてしまひました。私は百姓で、片田舎の野育ちで、禮儀も何も忘れませんでした。けれど皆さん、私はやはり今でもその、知識人なんで、眞面目なところ、話相手のないのは辛いものですなあ。」

先づ冷し料理として山葵と酸クリームをかけた仔豚の蒸肉が出、それから脂つこい舌の焼けるやうな豚肉入りのキャベツ汁と、湯氣が柱をなして立つてゐる蕎麥粥が出た。醫師は相變らず喋つてゐたが、私は間もなく、彼が性格の弱い、外見のだらしない、不幸な男であることを見たとつた。三杯の酒で酔つて、不自然に元氣つき、咽喉を鳴らし唇をぴちやつかせて盛んにぱくつき、いつの間にか私に『エツチェレンツァ』といふイタリヤ語の稱號を奉つた。彼を見たり聴いたりするのを私が非常に喜んでゐるのだと極めてしまつてゐるやうな風で、朴訥な眼附で私を眺めながら、妻とはとうの昔から別居してゐること、俸給の四分の三を彼女に仕送りしてゐること、彼女は子供達と一緒に町に住んでゐること、この息子と娘を彼は崇拜してゐること、彼は或る後家さんの女地主で知識のある女を愛してゐること、しかし普段は朝から夜中まで仕事に追はれて、まるで暇といふものがないので、滅多に逢ひに行けないこと——を話して聽かせた。

「一日ぢう病院に詰めたり往診に出たりで」と彼は語るのだつた、「全くですよ、閣下、好きな女の所へ行くどころか、本を讀む暇だつてありません。十年のあひだ何一つ讀みませんでしたよ。十年ですよ、閣下。それから物質的方面については、ひとつこのイヴァン・イヴァーヌイチにお訊ねを願ひたいです。時によると煙草錢もない始末でして。」

「その代り精神的な満足がおありでせう」と私は言つた。

「何ですつて？」と彼は訊き返して、片眼を細くして見せた、「いや、そんなことよりまあ一杯やりませう。」

私は醫師の話を聽く一方、いつもの癖で自分のおきまりの尺度を彼に當てて見た——物質主義者、理想主義者、金、群棲本能、等々。しかしどの尺度も近似的にすら當て嵌まらないのだつた。そして奇妙なことには、彼の話を聽いたり顔を見たりしてゐるうちは、彼は人間として私にとつて完全にはつきりしてゐた。ところが私が例の尺度を當てはじめるが早いか、實に明けつ放して單純極まるこの男が、異常に複雑な、こんぐらかつた、不可解な性格になつてしまふのである。

妻 『一體この男が』と私は自問するのだつた、『他人の金を費ひ込んだり、信用を裏切つたり、代金のいらぬ穀物を掻き込んだりする男だらうか。』そして今ではもう、曾ては眞劍な由々しいものだつたあの問題が、素朴で瑣末で粗奔なものに見えるのだつた。

揚饅頭が出た。それから、憶えてゐるが、長い間において（その合間々々に私達は果實酒を飲んでゐた）、鳩の肉汁が、臍物が、焙つた仔豚が出、鴨、鷓鴣、花甘藍、凝乳入りの團子、ミルクを掛けた凝乳チーズ、ジェリー、そして最後にジャムと縹緞のわるい薄焼がでた。はじめのうち、就中キャベツ汁と蕎麥粥とは舌鼓をうつて食べた。があとは、情ない微笑を浮かべ味も何も分かつたらずに、機械的に嚙んで呑み込んだ。舌の焼けるやうなキャベツ汁と室内の温氣のため、私は顔

がかつかと火照つた。イヴァン・イヴァーヌイチとソーボリもやはり眞赤な顔をしてゐた。

「令夫人の健康のために」とソーボリが言つた、「私はあの方のお氣に入りてな。侍醫が宜しく申したとお傳へ下さい。」

「仕合はせな人だよ、全く」とイヴァン・イヴァーヌイチは嘆息して、「自分では骨も折らず氣も揉まず、齷齪もしないのに、今や郡下隨一の人物になつてしまつた。事業の大部分はあの人の手中にあるし、ドクトルも郡會の上役連も婦人がたも、みんなあの人の周りに寄つてゐる。歴乎とした人間は自然とさうなるんだな。さう。……林檎に實を生らせるに氣を揉むことはない、自然に生るつてね。」

妻

「無頓着な連中は氣を揉まないさ」と私は言つた。

「ええ？ さう、さう……」とイヴァン・イヴァーヌイチは聴きとれずに、もぐもぐ言つた、「そりや全くさうだ。……無頓着でなくちやならんな人間は。成る程、成る程。……つまりその

……神様と人間の前に正しくありさへすりや、あとは野となれさね。」

「閣下」エツエレンツァ

とソーボリが莊重な顔をして言ふ、「ひとつわれわれの周圍の自然を見て頂きたい。

襟から鼻でも耳でも出したら最後、もぎ取られてしまふです。原つばに一時間も立つてゐたら、雪達磨になつてしまふです。村と來たらリューリクの頃も同じことであつとも變つちや居りま

妻

せん。相變らずのペチエネーグ人★だのポロヴェツ人★だのばかりです。知つてることと言つたら火の出ること飢饉のこと、それつきりで、まあ吾々は大車輪で自然と闘つてゐる譯です。ええと何の話だつたつけない？ さうさう。もしです、いいですか、まあ失禮な例ですが假にこの蕎麥粥をですな、よくよく考へ觀察し研究して見ます。するともうそれは人生なんかちやなくて、芝居小屋の火事なんです。そこで恐怖のあまり卒倒したり甲切聲を立てたり駆け出したりする輩は、秩序の大敵なんです。よろしく眞直ぐに立つて、兩眼を大きく開け、チュウとも言つちやなりません。めそめそ泣いたり、些事にかかづらつてゐる暇はありません。相手が盲目の力である以上、こつちも盲目の力を以て對抗すべきです。巖のごとく堅固に頑強でなくちやなりません。さうぢやないかね、お爺さん」と彼はイヴァン・イヴァーヌイチを顧みて笑ひ出した、「私といふ人間は、自分が百姓婆さんで襤褸つ布で、泣面蜂太郎だもんで、めそめそした事は我慢がならんのです。小つぽけな感情は大嫌ひなんです。或る者は鬱ぎ込み、或る者は怖氣つき、また或る者は今にもここへやつて來て、『やれやれ君等といふ人間は、十皿も平らげといてから飢民のことを喋りだすのか』と言ふでせう。實に小さくて愚劣です。更にある者は、エツエレンツァ閣下、あなたのことを金持だといつて非難するでせう。こんなことを申して失禮ですが、エツエレンツァ閣下」と彼は片手を胸に當てて、大聲でつづけた、「しかしながらです、あなたが此處の豫審判事に仕事を與へて、お宅の泥棒を日夜

捜させなされるといふのも、あなたとして失禮ながら矢張り小さいですな。私は一杯機嫌だもので、こんなことを今べらべら申すのですが、どうも些か小さいですなあ。」

「誰があつた男に心配して呉れと頼んだんでせう、僕には分からんな」と私は席を立ちながら言つた。と遽かに堪らなく恥かしく腹立たしくなつて、卓のまはりを廻りはじめた。「誰があつた男に心配して呉れと頼んだんだらう。僕はてんで頼みはしない。……あんな奴は鬼に攫はれるがいんだ。」

妻 「三人逮捕して放免したんですよ。人違ひだつたもんでね。今また新規に捜してますよ」とソ
ーポリは笑ひ出して、「罪ですなあ。」

「僕は斷じてあの男に心配して呉れと頼みはしません」と私は、興奮のあまり泣き出しさうになつた。「そんなことをして何に、一體何になるんです。さう、ぢや假に僕が間違つてゐた、私の遣り方が悪かつたとしませう、だが何だつて先生達は私ますます間違ひに踏み込むやうに仕向けるんです。」

「まあ、まあ、まあ」とソーポリは私を宥めながら、「まあ、私は一杯機嫌で口を滑らしたんですよ。私の舌は私の敵ですよ。さて」と彼は吐息をして、「御馳走も頂いたし、お酒も頂いたし、ではひと寝みますかな。」

彼は席を立つて、イヴァン・イヴァーヌイチの額に接吻し、満腹のあまりよたよたしながら、食堂を出て行つた。私とイヴァン・イヴァーヌイチは無言でしばらく煙草を喫つてゐた。

「僕はね、君、晝飯のあとで午睡はしないんだが」とイヴァン・イヴァーヌイチが言つた、「君はどうぞ長椅子部屋へ行つて休んで呉れ給へ。」

妻 私は言葉に従つた。その長椅子部屋と呼びならはされた薄暗い、熱いほど煖爐を焚きこめた部屋には、丈の長い幅のひろい頑丈でどつしりした長椅子が、壁際に並んでゐた。指物師ブトイガの作である。その上には、高いほどの厚味の、ふかふかした眞白な寢床が重ねてある。多分あの眼鏡の老婆が敷べたものであらう。寢床の一つに、長椅子の背に顔を向けて、上衣も長靴も脱いだソーポリが既に眠つてゐる。残る一つが私を待つてゐる。私は上衣を脱ぎ靴をとつて、疲労と、しんとした長椅子部屋に宿つてゐるブトイガの氣魄と、ソーポリの軽い優しい躰とに身を任せながら、おとなしく横になつた。

と忽ち私の夢に妻が、妻の仕事部屋が、怨めしさうな顔をした驛長が、雪の堆が、芝居小屋の火事が、あらはれはじめた。……家の納屋からライ麥を二十俵盗んで行つた百姓達も夢にあらはれた。……

「とにかく判事が彼等を放免したのはいいことだ」と私が言ふ。

私は自分の聲で眼が醒め、一分間ほど怪訝な思ひでソーボリの廣い背中を、チョッキの尾錠を、肥つた踵を眺め、それからまた横になつてうとうとする。

私が二度目に眼をさましたときはもう暗くなつてゐた。ソーボリは寢てゐる。私は氣持が安らいでゐて、早く家へ歸りたかつた。私は着物をきて長椅子部屋を出た。イヴァン・イヴァーミチは書齋の大きな肘掛椅子に坐つて、ぢつと身動きもせず有一點を見つめてゐた。私が寢てゐたあひだちう、彼はさうした麻痺の状態をつづけてゐたと見える。

「いい氣持だ」と私は欠伸をしながら言つた、「まるで復活祭*に精進落ちをしたあとで眼が醒めた時のやうな氣分だ。これからはたびたび君の所に寄せて貰ふよ。ねえ君、家内は君の所で御馳走になつたことがあるかね。」

「ちよ……ちよい……ちよいちはね」とイヴァン・イヴァーミチは、身動きをしようといふ力めながらぼそついた、「この前の土曜はここで晝飯をされたよ。さう……。あの人は僕を可愛がつて呉れる。」

ちよつとした沈黙のあとで私は言つた。

「君憶えてるかね、イヴァン・イヴァーミチ、君は僕に悪い性質があつて、附き合ひにくいつて言つたつけね。だがその性質を變へるにはどうすればいいのかね。」

「僕には分からないな、君。……僕は青ん脹れの皮の弛んだ人間だ、とても助言なんか出来ないうよ。……さう……。僕があの時それを言つたのは、君も好きだし、君の奥さんも好きだし、親父さんも好きだつたからだよ……さう。僕はもうぢき死ぬんだから、何の君に隠したり嘘をついたりすることが要るものかね。だから言つてしまふが、僕は君が大好きだけど、尊敬はしてゐない、さう、尊敬はしてゐない。」

彼は私の方へ向き直つて、息を切らしながらひそひそ聲をやつと出した。

妻
「君を尊敬することは出来ない相談だよ、なあ君。見たところは成るほど歴乎とした人間だ。君の外見と押し出しとは、丁度フランスの大統領カルノー*のやうだよ。こなひだ繪入新聞で見ただんだがね、さう。……君の言ふことは高尚だ、君は秀才だ、官等だつて及びもつかないさ。だがねえ君、君の心持が歴乎としてゐないんだ。……心持に力がないんだ……さう。」

「スキタイ人だね、要するに」と私は苦笑した、「だが家内はどうかね。何か家内のことも言つて呉れないか。君の方がよく知つてゐるんだからね。」

私は妻の話がしたかつた。がソーボリがはいつて来てそれを妨げた。

「ひと寝入りして、顔を洗つて來ました」と彼は純朴な眼で私を見ながら言つた、「ひとつラム入りのお茶でも頂戴して、お暇ませう。」

もう晩の七時を過ぎてゐた。控室から玄關の昇降口まで、イヴァン・イヴァーヌイチをはじめ二人の百姓女や、眼鏡の老婆や小娘達や百姓が總出で、口々に泣聲や凡ゆる幸福を祈る聲を立てながら見送つて呉れた。馬のまはりの暗闇には、提灯を下げた人々が佇んだり歩いたりしてゐて、私達の馭者に道順や走らせ方を教へ、私達に道中の無事を祈つた。馬も轎も人影も眞白だった。

妻
「あの家には一體どこからあんなにぞろぞろ出て来るんですか」と、私の三頭立てと醫師の二頭立てが並歩で庭先を出かけたとき、私は訊ねた。

「あれはみんなあの人の農奴ですよ」とソーボリが言つた、「あの人の所にはまだ時世の移り變りが来てゐないんですな。昔の召使の誰や彼やがああして餘生を送つてゐる、何處へ行かうにも身寄りのない孤兒みなしこもゐる、また坐り込んでしまつて挺子でも動かんといふ連中もあります。不思議な爺さんですよ。」

ふたたび轎の疾驅、酔拂つたニコノールの奇態な聲、風、眼に口に毛皮外套の襞といふ襞に這ひ込む執念ぶかい雪……。

『ほう、飛ぶわ飛ぶわ!』と私は思ふ。私の轎の鈴が醫師のにまじり合ひ、風が叫び、馭者等が喚く。これら狂ひ荒れるざわめきの下で、私は思ひ出す——この奇怪な暴々しい、生涯に一あつて二とない一日の巨細を。そして私は、自分が實際氣が狂つたか、または別人になつた思ひがする。今日この日までの自分が、今はもうまるで赤の他人のやうだ。

醫師は後ろに續いて、絶え間なしに大聲で自分の馭者と話してゐた。時々彼は私に追ひついて並んで走り、例の私にはそれが嬉しいに違ひないと極めてかかつた純朴な信念で、巻煙草をすすめたり、マッチを貸して呉れと言つたりした。または私と並んだかと思ふと、いきなり轎の中に背丈一杯にふんぞり返つて、腕のたつぷり二倍は長さうな毛皮外套の兩袖を振りながら、叫びはじめた。

妻
「ぴしぴしやれ、ヴァシカ! 千頭立てでも追ひ越しちまへ! ええ、仔猫めが!」

すると醫師の仔猫連は、ソーボリと彼のヴァシカの氣味よげな高笑ひとともに、ぐんぐん先に出た。私のニコノールはむつとして三頭の手綱を控へたが、やがてもう醫師の鈴音が聞こえなくなる。すると、兩肘を張つて一聲喚き、そして私の三頭立トイカは氣狂ひのやうに後を追つて疾驅した。どこの村へ乗り入れた。燈火がきらめき農舎の影繪がちらつき、誰かが『やい、畜生!』と喚いた。二露里は飛ばしたと思ふのに、街路はまだ續いてゐて、その果てしは見えない。醫師の轎と並んで速度を落したとき、彼はマッチを請うて言つた。

「まあひとつ、この街を養つてやつて御覽なさい。ところが此處には、こんな街が五つもあるんですからねえ。おい、とめろ、とめろ！」と彼は叫んだ、「居酒屋へ廻すんだ。ひと暖まりして、馬も休ませにやららん。」

居酒屋の傍でとまつた。

「私の管區にはこんな部落は一つどころぢやないのです」と醫師はきいきい云ふ滑車のついた重たい扉を開けて、私を先に入れながら言つた、「晝日なかに眺めたところで、かういつた街には果てしが見えません。それにまだ横町もある、全く頭を掻くほかはないです。何かしてやらうにもなかなか骨ですよ。」

私達は「小ぎれいな」部屋に通つた。そこでは卓子掛の臭氣が鼻をつき、私達のはいつて來た氣配に、外側に出して帶をしめたルバーシカとチックキだけになつて睡つてゐた百姓が、ベンチから跳ね起きた。ソーボリは麥酒を、私は紅茶を頼んだ。

「何かしてやらうにも中々骨ですよ」とソーボリが言ふ、「あなたの奥さんは信念をもつてをられる、私はあの方の前には頭を下げます、敬服します。だが自分としてはからつきし信念が持てないので。私どもの民衆に對する關係が、あり來たりの慈善の性質、つまり育兒院だとか癩病院だとかに見られるやうな性質を帯びてゐる間は、私達は狡く立ち廻つたり誤魔化したり、自己

欺瞞をやつたりして濟ましてゐるだけの話です。本當はわれわれの關係は實務的なもの、計算と知識と正義とに基いたものであるべき筈です。あのヴァシカは若い時からずつと私のところで作男をしてゐた者ですが、やはり家が凶作で、あの男は飢ゑて病氣になつてゐます。で今假りに私があつた男に一月十五哥コペグづつ遣るとすれば、それで私はあの男を元の作男の境涯に戻さうとする事になります。つまり先づ何よりも私自身の利益を確保しながら、しかもその十五哥を、どういふ譯か救濟とか救恤とか善事とか名づける譯ですね。そこで一つかうして見ませう。最も内輪に見積つて一人當り七哥とし、一世帯を五人づつとすると、一千世帯を養ふには日に三百五十留ルシナルかかります。この數字こそ、一千世帯に對する私達の實務的且つ必至の關係を決定するものです。ところがどうです、私達は日に三百五十どころか、ただの十留シナルこつきりを出して、やれ救恤だとか救濟だとか、それであなたの奥さんはじめ私達がみんな實にどうも素晴らしい人間だとか、人道萬歳だとか言つてゐます。ざつとまあ斯うした次第ですよ、あなた。ああ、私達が人道を喋々する時間を減らして、その代りもつとよく計算し分別し、もつと良心的に自分等の義務に對するこゝとにしたなら、どんなにいいでせうなあ。成るほど誠心誠意、密附申込書を抱へて軒のきなみを駈けずり廻りはするが、一方自分の仕立屋や料理女の仕拂ひはしない——そんな人道家そんな同情家が私達の間には何人あるか知れませんか。論理といふものが私達の生活にはないので、それですよ。

論理ですよ。」

私達は沈黙した。私は頭のなかで計算して言った。

「僕は千世帯を二百日間養ふことにします。明日打ち合はせにいらして下さい。」

私はそれを簡単に言ったのが満足だった。更にソーポリがもつと簡単に答へたのが嬉しかった。

「承知しました。」

私達は勘定を済ませて居酒屋を出た。

妻 「私はかうして無駄口を叩くのが好きでしてね」とソーポリは櫛に坐りながら、「エツチエレツツア閣下、マツチを貸して下さい。あの店みせに忘れて来てしまひました。」

十五分後には彼の二頭立ては遅れてしまひ、吹雪の音に遮られて彼の鈴音はもう聞こえなかつた。家に歸ると、私は自分の部屋から部屋を歩き廻つて、自分の地位を熟慮し、それに對する自分の氣持を出来るだけはつきりさせたいと力めるのだつた。私には妻に言ふべき一言半句の用意もなかつた。頭が働かないのだ。

何にも考へつかぬままで、私は妻の部屋へ降りて行つた。彼女は仕事部屋に、相變らず薔薇色の部屋着をきて、自分の書類を私から遮らうとするやうな例の恰好で立つてゐた。彼女の顔には困惑と嘲笑の色があつた。明かに彼女は私の歸りを聞いて、昨日のやうに泣顔を見せまい、頼み

もしまい、禦ぎもしまい、その代り私を嘲笑ひ、侮蔑の籠もつた返事をし、きつぱりした態度に出ようと、心構へをしてゐたらしい。彼女の顔は語つてゐた——さうなら、左様ならですよ。

「ナタリイ、僕は發たたなかつたよ」と私は言った、「だがこれは瞞ましたわけではない。僕が氣が違つた、老いぼれた、病氣だ、別人になつてしまつた——どうでも好きなやうに思つてお呉れ。……今までの僕といふものから、僕はぞつとして飛び退いて、ぞつとする思ひでそれを輕蔑し恥ぢ入つてゐるのだ。そして昨日から僕の裡にゐるその新しい人間が、僕の出立を許さないのだ。

僕を追ひ出さないでお呉れ、ナタリイ。」

妻 彼女はぢつと私の顔を見つめて、私の言葉を信じ、そして彼女の眼には不安の色がひらめいた。彼女が身近かにゐるのに恍惚うろたとし、彼女の部屋の温かさに暖められて、私は彼女へ兩手を差し出したながら、譚言のやうに呟くのだつた。

「僕は本心から言ふ——君を措いては僕には誰一人親おしい者はない。僕はこれまで片時だつて君を慕はずに過ごしたことはない。ただ頑なな自尊心がこの告白を妨げてゐただ。僕等が夫と妻として暮らしてゐたあの過去の日は、もう返るまいし、また返つて欲しくもない、ただ僕を君の下僕にして呉れないか、僕の全財産を取つて、誰なりと好きな人間に分配して呉れないか。僕は氣が安まつた、ナタリイ、僕は満足だ。……僕は氣が安まつた。」

妻はちつと不思議さうな眸で私の顔を見つめてゐたが、やがて急に小さな叫び聲を立てて泣きだし、次の間へ駆け込んでしまつた。私は二階へ歸つた。

一時間後には私はもう机に向つて『鐵道史』を書いてゐて、飢民も仕事の邪魔にななかつた。今日では私はもう不安を感じてゐない。二三日まへ妻やソーボリと一緒にベストローヴォの農舎を見廻つたとき眼にした亂雑さも、不吉な風聞も、奉公人達の過失も、すぐそこに來てゐる老境も、何一つ私の心を亂しはしない。戦地に飛びかふ砲弾も銃弾も、兵士達の身の上話や食事や靴の繕ひを妨げはせぬやうに、飢民は私が安眠をし私個人の仕事をすることを妨げない。私の家の中にも屋敷内にも、遙かぐるりの一帯にも、ドクトル・ソーボリが『慈善的亂痴氣騒ぎ』と呼ぶ仕事か湧き返つてゐる。妻はよく私の所へやつて來ては、私の部屋部屋をきよときよと眺め廻す。まるで『自分の生活の言譯を見附ける』ため、何かまだ飢民にやるものはないかと捜してゐるやうな風である。そして私は、彼女のお蔭で間もなく私達の財産は残らず無くなつて、私達は貧乏人になるだらうことを想見する。しかしそれも私の心を波立たせはせず、私は晴れ晴れと彼女に笑ひかける。この先どうなるか、それは知らない。

譯註

決闘

三 ネフスキイ ペテルブルグの廣小路の名。

一六 ヴェレシチャーギン (ヴァシーリイ・ヴァシーリエヴィチ) 有名な畫家。トルケスタン風俗、ブルガリヤ戰役、聖書などに取材した名畫が多く、そのほか風景畫や歴史畫の作もある。非常な旅行家で、また數次の戰役に從軍、遂に旅順口に於いて戰艦ペトロパヴロフスクの爆沈と運命を共にした(一八四二—一九〇四)。

二〇 チェルケース人 コーカサス、クバイン河以南に名残りをとどめる一民族。正統派の回教を奉ずる。

二二 グルジャヤ人 外コーカサスに住むコーカサス族の一。正教を奉じ、自己の言語、文學を有する。

二三 アブハジャヤ人 黒海東北岸及びコーカサス山中に住む一民族。

三〇 ヴイント 四人でする骨牌遊びの一種。

三一 ヴォロンツォフ公 コーカサスの役、トルコの役、ナポレオン戰爭に戰功あり、のちコーカサス總督としてこの地方の恩人であつた(一七八二—一八五六)。

四 土木工事 飢饉や不況時に、その匡救のため國家や社會團體が興す公共土木事業を指す。

五 デルプト 公式のロシア名をユーリエフといつた。また一名をドルパードといふ。大學があり、現在はエストニアの

都市である。

七六

『ウクライナの夜』 プーシキンの史詩『ポルタヴァ』の第二歌中、ウクライナの夜の静寂を寫した部分を指す。これには次の五行にはじまる相異なる二聯があり、ポルタヴァの戦況を寫した雄渾な詩節と相並んで、古今の絶唱とされてゐる。――

ウクライナの夜は静かに、

天は澄みわたり、星はきらめく。

己れが甘睡をみださんことを

大氣は欲りせず。わづかにさやげるは

しろがねのポプラの葉のみ。

七六

呼氣は霜をむすんで、海狸の襟に銀とかがやく プーシキンの詩句。『エヴゲーニイ・オネーギン』第一章十六節。オネーギンが華やかなペテルブルグの社交場裡に青春を浪費するダンディ振りを絞したくだりで、すなはち強く北方へ牽かれるライエフスキイの氣持を察すべきである。

八九

ヴィルフランシユ 南佛、ニースに近くゼノア灣に臨む町。避暑地として名高い。

九二

アラクチェーエフ (アレクセイ・アンドレーヴィチ) アレクサンドル一世の寵臣。伯爵。陸軍大臣として、その極端な反動政治を以て残忍魯鈍の名を史上にとどめた(一七六九―一八三四)。

二七

ピローグ ロシア特有の揚げ饅頭。肉、粟、キャベツ、豆、魚肉、果物などを詰物にする。

二八

門口ヘタールを塗る その家内の女に不身持があつた場合に、村人が侮辱乃至譴責の意を表はす目的で表扉にタールを塗る。一種の道徳的私刑である。

五點 五點満點である。

ノヴォロシースク 黒海東北岸にあるコーカサスの港市。

三九

熊の親切 熊が主人の顔にとまつた蠅を追はうとしてその顔を叩き潰してしまつたといふ、クルイロフの寓話詩『隠者と熊』に基づく慣用句。有難迷惑の意。

二五

レスコフ (ニコライ・セミョーノヴィチ) 短篇を得意としたロシアの小説家。僧侶階級、商階級、小市民層など、比較的知られざる階級を描くのを特色とした(一八三一―九五)。

二六

ペトロパヴロフスク要塞 ペテルブルグ、ネヴァ河に臨む歴史的要塞。一七〇三年ピョートル大帝の起工にかり、勿論夙に軍事的意義を失つてゐる。構内に國事犯を收容する監獄があつた。

二七〇

チェチニヤ人 北部コーカサスに住む未開民族。中で最も癡猛な種族は土耳其に移住し、その名残りをとどめる。

妻

二四

獸の名前を持つた醫者 手紙の中に見えるソーポリといふ姓は黒貂といふ字である。

二三

三人寄れば文珠の智慧 原文は羅匈語の“Tres faciant collegium” (Digesten 87)。

二五

シエレメーチエフ伯 (ポリース・ペトロヴィチ) ピョートル大帝の股肱の臣、その改革に與かつて力があつた。就中ポルタヴァの役に總司令官として大功があつた(一六五二―一七一九)。

二八

プード 一プードは四貫三六八匁、一六・三八匁。

三三

同名者(チヨースカ) 洗禮名を同じくする者同志である。ロシアでは洗禮に當つて聖僧の名に因んで命名するところが多かつた。そして該聖僧の命日を「名の日」と稱して祝つた。従つて同名者同志に一種の親しみがある譯である。

- 三九 エノイト 浣熊(あらひぐま)。ソーボリ(黒貂)氏をわざと言ひ違へた。
- 三六 スキタイ人 土耳古タールに出た種族の古稱。コーカサス及び黒海の北方ステップ地帯に住んでゐた。頗る戦を好み、現在では野蠻人の戲稱に用ひられる。
- 三六 チェルケース云々 この場合、馬の名であるが、それぞれ『チェルケース人』(二〇頁の註参照)、『農夫』、『眞嗣』の意がある。
- 三六 砂壺 往時は砂を吸取紙の代用とした。その容器である。
- 三七 反覆は云々 原文は *Repetita est mater studiorum* とある。恐らく作者の故意か。蓋しロシア語では *repetitsia* である。
- 三七 リューリクの頃 すなはち九世紀。
- 三七 ペチエネーグ人 十一十二世紀頃、南露からドナウ河にかけて横行した土耳古族に屬する遊牧民。十三世紀にマヂヤール族と混淆して跡を絶つた。
- 三七 ポロヴェツ人 十一十三世紀にかけて南露地方に跳梁した土耳古族の一派。
- 三六 復活祭 春分後第一の満月に次ぐ日曜日(露曆三月二十二日から四月二十五日の間に落ちる)を復活祭日とし、この日それに先立つ六週間の精進(大齋)を破る。つまり精進落ちである。
- 三五 大統領カルノー(サディ) フランスの技師兼政治家。一八八七年共和國大統領となり、一八九四年イタリヤの無政府黨員に暗殺された。

解題

ここに収めた二つの作品は、ともに一八九一年の所産である。

その前年十二月九日(露曆)、チェーホフは生涯の一大事件たるサガレンの旅からモスクヴァに歸着したのであるが、この旅の後で見るロシヤの生活が、彼に退屈と焦躁を強ひこそすれ、些かの満足をも齎らすものでなかつたことは言ふまでもない。之に加ふるに狭小な文學者仲間の嫉視排擠、また對人關係の煩はしさに堪へず、彼はサガレンの小學兒童のための寄贈書籍類に關する奔走の一段落を告げるとともに、ペテルブルグの大新聞『新時代』*Koroe Vremya*の社主であり、また當時彼の庇護者であつたスヴォーリンの誘ひに應じて、一八九一年三月十九日、はじめの南歐の旅にのぼつた。維納、ヴェニス、ボローニヤ、フロレンス、羅馬、ナポリ、ニス、モンテ・カルロと經めぐり、四月末巴里を發つてモスクヴァに歸つたが、その間殆ど連日雨に禍されたのみならず、前年の大旅行に引きつづくこの旅は、豊かならぬ彼の財囊にさらに負擔を加重したのであつた。彼は相變らず暗澹たる氣持をいだいて歸國すると、直ちにモスクヴァ縣に南接するトゥーラ縣下アレクシン驛の近くに別莊を借り入れ、同じ五月さらに同地に程遠からぬボギモヴォ村(カルーガ縣下)の別莊に移つて、閑却された仕事を急がなければならなかつた。

その夏は旱天^{ひだり}つづきで、來たるべき冬の大飢饉の豫兆を見せてゐたが、このボギモヴォの一夏は、種々の意味で充實したものであつた。まづその生活の楽しさは次の手紙からも窺はれるであらう。

「私は他の別莊に移りました。何といふ寛らかさでせう！ 私は大きな貴族館の二階をすつかり占領してゐます。巨きな部屋ばかりで、うちの二つは貴方の家の廣間ほど、いや寧ろ大きいくらゐる。その一つには圓柱が並び、樂手の席があります。家具を入れるときには、巨きな部屋部屋を歩いたことのない私達はへとへとなりました。素晴らしい庭園、池、水車小屋のある小川、ポート——それらみなは、まるでもう恍惚^{うつと}するばかりの夥しい細部から成り立つてゐます。(中略) 鮒がとてもよく釣れます。昨日は凡ての憂さを忘れて、池の畔に坐り込んで鮒を釣つたり、荒廢にまかせた水車小屋の傍に陣取つて鱸を釣つたりしました。土地の風俗も色々面白いことがあります。」(九一年五月二十日、スヴォーリン宛)

この別莊の印象は、彼の全作中でも最も抒情味に富むものとされる後年の作『中二階のある家』*Dom s mezoninom* (一八九六年發表)の背景をなしてゐるが、かうした環境に包まれてのチェーホフの仕事ぶりは、その年の秋この生活を顧みて、「私は怖ろしく書きたい、ボギモヴォでのやうに、つまり朝から晩まで、そして夢の中でまで」(九一年十月十六日、同人宛)と述べてゐる所からも察せられるであらう。彼はここで『サガレン島』*Ostrov Sakhalin*の稿を起こしたほか、六月には『女房ども』(本文庫『シベリヤの旅』参照)を脱稿、さらにここに収めた『決闘』*Duel*を書き上げた。なほチェーホフはこの地に避暑中の多數の知識階級人と交はり、就中動物學者にして文學者を兼ねたニコライ・ヴァグネルと協力して、時評的な一文『手品師たち』*Tokusniki*を書いたりした。これは當時の學界に君臨してゐた有名な動物學者・人類學者アナトリー・ボ

グダーノフ教授の學的「いかさま振り」を難詰したものである。

『決闘』は、年頭早々モスクヴァで稿を起し、八月上旬この村で脱稿されたもので、チェーホフの藝術作品中では量的に最も大きな小説である。非常な苦心の拂はれた作で、脱稿した頃の手紙に、「この小説に^フ露封度の神経を費消した」といふ述懐が見出される。同年十、十一兩月、『新時代』紙に十一回にわたつて分載され、翌九二年單行本となり、更にマルクス版全集に収めるに當つて夥しい變改が施された。本譯は後者によつてゐる。

およそチェーホフの作品で、何等かの意味でインテリゲンツィヤの問題を基調とせぬものはな
いと言はれてゐる。この『決闘』の主題も一見して明かなやうに、チェーホフによつて見出され
た二つのインテリゲンツィヤの對立である。すなはち、批評家デルマンの言葉によれば、一は意志
薄弱な無爲の夢想家(ライエフスキイ)であり、他は強固な確然たる信念の持主であり直往の實
行家(フォン・コーレン)である。かうした對立は、既に一八八七年の作にかかる戯曲『イヴァ
ーノフ』^{Танго}にも見出され、チェーホフの執拗な究明の對象となつてゐるのであるが、さりとて作家として飽くまで純客觀の立場を抛棄しなかつた彼は、ここに性急な解決を提出してゐる
譯では勿論なく、その社會的背景の缺如と相俟つて、照明は主としてこの二つの人物の心理的葛
藤のうへに注がれ、動きに富んだ純粹に小説的な作品をなしてゐる。

この作品について、チェーホフ自身が手紙その他にその内心の動きを述べてゐる箇所は極めて
尠い。その一二を拾へば、ライエフスキイといふ名に落ちつく迄に二三の名の間に迷つたことに

關して、「ロシアの生活は今や實に混亂してゐる。で、どんな姓でも當て嵌るのです」(八月三十
日)と述べ、またスヴォーリンが『虚偽』と改題することを勧めたのに答へて、「その題は、意識
的な虚偽を扱つた部分にのみ適合します。無意識な虚偽は虚偽ではなくて過失です。吾々が金錢
を持ち肉食をするのを、トルストイは虚偽と名づけてゐますが、これは酷すぎる」(九月八日)と
言つてゐる。なかんづく後者はこの小説の鑑賞に一つの照明を投ずるものと考へられる。そのほ
か作品に關する反省としては、起稿後間もなく、「私の小説は進捗しつゝあります。一切は圓滑で
坦々とし、冗長さは殆どありません。がここに頗る怪しからんことのあるのを御存知ですか。こ
の小説には動きといふものがない、それが私を脅かすのです」(二月二十三日)、および、「もし
『決闘』から動物學上の會話を取り去つたなら、その爲めもつと生き生きとして來はしますまい
か」(八月三十日)などがある。

チェーホフは八月一杯でボギモヴォを引きあげ、モスクヴァ、マラーヤ・ドミートロフカ街の
家に歸つた。そして忽ち不安の波立ちの只中へ身を投じなければならなかつた。稀に見る飢饉が
歐露の諸縣に襲來したのである。飢ゑた農民に對する社會人士の關心は異常に昂まつた。チェー
ホフが、舊友でありニジニ・ノヴゴロド縣の地方自治會長であるエゴロフに宛てた手紙の次の
やうな一節は、この飢饉をめぐる社會の情勢を極めて端的に物語るであらう。――

「……問題は公衆が政府を信任せず、ために義捐を差控へてゐることにあるのです。浪費だの

厚顔無恥な詐欺取財だのといふ、無数の空想的なお伽嘶や寓話が行はれてゐます。正教管區監督局は毛嫌ひされてゐるし、赤十字社は憤慨の的になつてゐます。私の思ひ出の地バブキノ地主であり、地方自治會長である某は、露骨且つ斷乎として私の勧誘を斷りました、曰く、『モスクヴァの赤十字は泥棒です！』かういふ空氣であつては、政府は到底社會の眞摯な助力を得ることは出来ません。しかもやはり公衆は慈善がしたいのですし、その良心は平らかでないのです。九月にモスクヴァの知識階級及び財閥は、それぞれグループを作つて、考究し討議し、脳味噌をしぼり、その道に明るい人々の助言を求めました。皆どうしたら政府の手を経ずに獨立に救済の組織ができるかといふことを論究したのです。結局飢饉に悩む諸縣へ人を派して、現地の狀況を視察させ、給食所その他を設置させることに決まりました。グループの幹部である二三の有力者がドゥルノヴォ〔筆者註。イヴァン、時の内務大臣〕の所へ許可を得に出掛けるところ、ドゥルノヴォは、救済事業は正教管區監督局及び赤十字社にのみ委ねらるべしと言つて、はねつけました。つまり私人のイニシアチヴは出鼻をばつさりやられた形です。みんな落膽し沮喪しました。或る者は激怒し、或る者はあつさり手を引きました。あらゆる禁止や一般の空氣に抗して起ち、義務の命ずる所を爲すためには、トルストイの勇敢と權威とを持たねばなりません。』(十二月十一日)

既にサガレンの洗禮を受けてゐたチェーホフが、かうした情勢の裡に晏如たりうる筈はない。十月初旬には既に、リベラリズムの色彩を帯びた新聞『ロシヤ報知』*Russkije Vedomosti* によつ

て、飢民救済のための文集が計畫され、これに『新時代』その他の有力な新聞雑誌がそれぞれの立場を棄てて協力し、その年末に出版されて(通常一八九二年版に數へられてゐるが)、立派な成績を擧げた。チェーホフ自身は『サガレンの脱走者』*Bežnye na Sakhaline* (『サガレン島』の第二十二章の原型)をこの秋に書き上げて寄稿したほか、スヴォーリンと『ロシヤ報知』の主幹ソボレフスキイとの間の連絡につとめるなど、頗るこの文集に盡力するところがあつた。また、この間に處してのトルストイやコロレンコの活躍ぶりには一籌を輸するにもせよ、チェーホフも亦、右の文集のごとき文學者としての貢獻の境に安住してゐた譯ではなかつた。彼は義捐金の募集に懸命の努力をした。農民がアカザをまで食用に供しはじめたとの報に、その榮養價について『新時代』紙上で専門家の意見を求めもした。さらに翌一八九二年の一月と二月には、自らニジニ・ノヴゴロド縣及びヴォロネシ縣を視察もした。

しかしながら、かうした外の動きの反面には、知識人としての彼の悲痛な告白を見のがす譯には行かないのである。すなはち、「私はたとへ半月でもいい、家を逃げ出さなくちやならぬのです。朝から夜まで私は不愉快な苛立ちを覚え、誰かが私の魂に鈍いナイフを引き廻してゐるやうな氣がしてゐます」(九一年十月十六日、スヴォーリン宛)といひ、また、

「ああ皆さん、何と退屈なことだ！ 私が醫者なら、患者と病院が要る。私が文學者なら、こんなマラーヤ・ドミートロフカの家で猫鼬マンゲリスを相手に暮らさないで、民衆の中で暮らすことが必要だ。社會的・政治的生活の一かけらでもいい、ほんの小つぽけな一かけらでもいい、それが

入用です。四方の壁に囲まれて、自然もなく人々もなく祖國もなく、健康も食慾もない生活——これは生活ではありません。……」（一八九一年十月十九日、スヴォーリン宛。猫馳はチェーホフがセイロン島から三匹を持ち歸つて愛玩してゐたもの）

この悲惨な叫びを擧げずには居られなかつたチェーホフであつたのである。かうした反面の叫びは更に、この年十二月九日附『新時代』紙の讀物欄記事として、キスリャーエフ（「泣蟲」の意）といふ署名で掲げられた『モスクヴァで』*V Moskve* といふ諷刺文に最も痛烈な表白を見出してゐる。これは「私はモスクヴァのハムレットだ」といふ文句ではじまり、ロシア知識階級人の無氣力さ、その陥つた袋小路について、歎きと毒舌を縦まにしているものであるが、就中「理想はどこにある？」といふ文句は恰も時代の歎歎の如くに、鋭い疊句をなして全章を貫いてゐる。

『妻』*Zhena* は右のやうな情勢と奔走と内心の錯亂の渦中に生まれた作品である。一八九一年十月末にモスクヴァで脱稿され、雑誌『北方通報』*Sovernij vestnik* の一八九二年一月號に掲載、その翌年單行本になつた。マルクス版全集は更に凡そ百七十個所に互る變改を施したものであつて、本譯はこれによるものである。

この作品が極めて自己批判、或ひはひろくインテリゲンツィヤ總體への批判的要素の強いものであることは、敘上の経緯から略々明かであらうと思ふ。ただ念のため申し添へて置きたいのは、この作品は右に記した月日からも察せられるやうに、彼が飢饉地を親しく觀察する以前に書かれてゐることである。彼は翌年一、二月にその地方を見舞ひ、ニジニ・ノヴゴロド縣ではエゴーロフと協力して飢民のために馬匹購入の機關を設けた。これは飢饉に迫られて馬匹を失つてしまつた飢民のため、馬匹を購入し春まで公費で飼養して、耕作期の到来とともに飢民に配給するものである。この周到な措置はしかしながら、さして實際的な効果はなかつたといはれる。またヴォローネシ縣へはスヴォーリンとともに行つたが、それかあらぬか歡迎會その他の連續で、結果はチェーホフにとつて不満なものに過ぎなかつた。

サガレン旅行が人および作家としてのチェーホフの生涯を兩斷してゐることは明かであるが、一層細かく觀察すると、その各期はさらにそれぞれ二つの時期に分けることができる。すなはち一八八〇年の處女作から八四年の大學卒業までを習作期とし、卒業から八〇年代の末までを八〇年代作家の時代とし、一八九一年から九八年秋までを成熟期とし、この秋南露へ居を移してから以後を晩年とする見方である。これは一見煩瑣な區分けのやうにも見えようが、仔細に彼の魂の發展史を跡づけ、生活環境の變化や時代の動きに關聯させて考へると、必ずしも不自然なものでないことが分かつて来る。

特にその第三の時期は、彼の生涯のうち最も活潑な思考と最も眞摯な勞作とによつて盛られてゐる時代であつて、もとよりその進展は典型的なインテリ作家として避けえられぬ自己撞着に満ち、動搖に満ち、緩徐でありジグザグではあるにせよ、所謂「個人的自由感」の徐々たる獲得、従つてはトルストイズムからの解放、『新時代』（この新聞は保守的貴族及び官僚の代辯機關であ

つたとされる)の羈絆からの脱却、さうした動きにつれてのインテリ観の撓まざる誠實な修正、等々の否むべからざる力學的な發展の跡をとどめてゐるのである。そして今私達の前にある一八九一年は、未だ彼の精神が、懷疑に苛まれつつもトルストイズムの影響を脱しえず、『新時代』の繫縛のもとに身もだえしてゐた時代の終曲にほど近く、來たるべき『六號病室』(Palata No. 6)あたりから凡そ八年間にわたる悪闘の、意味ぶかい序曲をなすものと考へられる。

昭和十一年初夏

譯者

(附記)なほこの年の秋の所産に中篇小説『移り氣な女』(Poprygnija)がある。原久一郎氏の譯によつて本文庫『接吻・可愛い女』に『浮氣』と題して收められてゐるのがそれである。この作品は十一月末モスクヴァで脱稿され、翌年一月、週刊誌『北方』(Sever)第一、二號に分載された。原稿を發送するに當つてチェーホフは、「家庭の讀物として小つちやな多感なロマンをお送りします」と記してゐる。トルストイはこれを讀んで、「素敵だ、素敵だ。最初にユーモアがあり、それからこの眞面目さだ。……そして、彼の死後に彼女がまた全く同じ女に返るであらうことが、何とよく感じられることだ」と激賞した。またこの作品をめぐつてモデル問題を惹起し、作者を迷惑させたといふ挿話がある。

(永井製本)

昭和十一年六月十日印刷
昭和十一年六月十五日發行

決闘・妻 ★★
定價四十錢

譯者 神西清

發行者 東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者 東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

精興社印刷

岩波文庫
1302-1303

11.6.9

發行所

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話 〇一八七〇一
九段 〇一八七〇一
振替口座東京二六二四〇番

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために煥藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を小數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に任せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繋縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學

- 古事記 幸田成友校訂
日本書紀 上卷 黒板勝美編
日本書紀 中卷 黒板勝美編
日本書紀 下卷 黒板勝美編
新紀歌謠集 武田祐吉校註
新萬葉集 上卷 佐佐木信綱編
新萬葉集 下卷 佐佐木信綱編
白萬葉集 上卷 佐佐木信綱編
白萬葉集 下卷 佐佐木信綱編
祝詞・壽詞 千田 憲編
古語拾遺 加藤玄智校訂
竹取物語並附録 鳥津久基校訂
伊勢物語 屋代弘賢校訂
古今和歌集 尾上八郎校訂

- 土佐日記 池田龜鑑校訂
神樂歌・催馬樂 武田祐吉編
倭漢朗詠集 山田孝雄校訂
枕草子(春曙抄) 上 池田龜鑑校訂
枕草子(春曙抄) 中 池田龜鑑校訂
枕草子(春曙抄) 下 池田龜鑑校訂
源氏物語(一) 鳥津久基校訂
源氏物語(二) 鳥津久基校訂
源氏物語(三) 鳥津久基校訂
源氏物語(四) 鳥津久基校訂
源氏物語(五) 鳥津久基校訂
紫式部日記 池田龜鑑校訂
更級日記 西下經一校訂
三條西榮花物語 上 三條西公正校訂
三條西榮花物語 中 三條西公正校訂
三條西榮花物語 下 三條西公正校訂
大鏡 和田英松校訂

- 梁塵秘抄 佐佐木信綱校訂
新山家集 佐佐木信綱校訂
水鏡 和田英松校訂
松浦宮物語 蜂須賀信子校訂
新古今和歌集 佐佐木信綱校訂
藤原定家集(附定家集年譜) 佐佐木信綱校訂
新金桃和歌集 新編 野藤茂吉校訂
中世歌論集 久松潜一編
方丈記 山田孝雄校訂
保元物語 岸谷誠一校訂
平治物語 岸谷誠一校訂
平家物語 上卷 山田孝雄校訂
平家物語 下卷 山田孝雄校訂
東關紀行・海道記 玉井幸助校訂
十六夜日記 玉井幸助校訂
神皇正統記 山田孝雄校訂
増鏡 和田英松校訂

徒然草 西尾實校訂
 謠曲選集 野上豐一郎編
 閑吟集 附狂言小歌拾遺集 藤田德太郎校註
 好色一代男 和田萬吉校訂
 好色一代女 和田萬吉校訂
 好色五人女 和田萬吉校訂
 西鶴雜記 西田萬吉校訂
 本朝櫻陰比事 西田萬吉校訂
 武道傳來記 和田萬吉校訂
 武家義理物語 和田萬吉校訂
 日本永代藏 和田萬吉校訂
 世間胸算用 和田萬吉校訂
 西鶴織留 西田萬吉校訂
 奧の細道その他 伊藤松字校訂
 芭蕉七部集 伊藤松字校訂
 註芭蕉俳句集 原退藏校註
 芭蕉連句集 小宮豐隆編
 芭蕉書翰集 勝峯晉風編

芭蕉花屋日記 小宮豐隆校訂
 風俗文選 伊藤松字校訂
 燕村七部集 伊藤松字校訂
 燕村俳句集 原退藏編註
 松の落葉 藤田德太郎校註
 國性論合戦 近松門左衛門作
 心我合稽 近松門左衛門作
 會根崎心 近松門左衛門作
 用明天皇職人鑑 近藤忠義校訂
 鶉衣 石田元季校訂
 雲萍雜志 柳澤洪園著
 洒落本集 高木好次校訂
 玉勝間(上) 本居宣長著
 玉勝間(下) 本居宣長著
 うひ山ふみ 本居宣長著
 鈴屋答問 村岡與嗣校訂
 玉くし 本居宣長著
 秘本くし 本居宣長著
 雨月物語 上田秋成作
 錦木教也校訂

註良寛詩集 大島花東譯註
 椿説弓張月 上卷 和田萬吉校訂
 椿説弓張月 中卷 和田萬吉校訂
 椿説弓張月 下卷 和田萬吉校訂
 胡蝶物語 和田萬吉校訂
 新編一茶俳句集 萩原井泉水編
 おらが春・我春集 萩原井泉水校訂
 遺稿父の終焉日記 萩原井泉水校訂
 鈴木越雪譜 岡田武松校訂
 東海道膝栗毛 十返舎一九作
 風柳多留 上卷 西原柳雨校訂
 風柳多留 中卷 西原柳雨校訂
 風柳多留 下卷 西原柳雨校訂
 浮世風呂 式亭三馬作
 浮世床 式亭三馬作
 萬載狂歌集 野崎左文校訂
 徳和歌後萬載集 野崎左文校訂

忍ぶの戀 太阿彌校訂
 縮屋新助 河竹繁俊校訂
 鼠小僧 河竹繁俊校訂
 赤垣源藏・仲光 河竹繁俊校訂
 辨天小僧 河竹繁俊校訂
 鳩の平右衛門 河竹繁俊校訂
 お森お仙 河竹繁俊校訂
 實録先代萩 河竹繁俊校訂
 孝子善吉 河竹繁俊校訂
 加賀鳶 河竹繁俊校訂

茶の日本思潮 本岡倉覺三著
 宮崎農業全書 土屋番雄校訂
 都鄙問答 石田梅巖著
 手島堵庵心學集 白石正邦編
 松翁道話 石川謙校訂
 校訂道二翁道話 石川謙校訂
 鳩翁道話 石川謙校訂
 蘭學事始 杉田玄白著
 一齋言志四錄 山田準譯註
 經濟要錄 佐藤信淵著
 報徳記 富田高慶述
 二宮翁夜話 福住正兄筆記
 海舟座談 巖本善治編
 日本道德論 西村茂樹著
 福澤撰集 福澤諭吉著

文明論之概略 福澤諭吉著
 蹇蹇錄 陸奥宗光著
 兆民選集 中江篤介著
 一年有半・續一年有半 中江篤介著
 日本開化小史 田口卯吉著
 内村鑑三隨筆集 內村鑑三著
 清澤文集 清澤藩之著
 綱島梁川集 安倍能成編
 現代文學
 新曲浦映 島坪内遺墨著
 うたかたの記(他三篇) 森 鷗外著
 キタ・セクスアリス 森 鷗外著
 雁 森 鷗外著
 護持院ヶ原の敵討(他二篇) 森 鷗外著
 左千夫歌集 土屋文吉選
 左千夫歌論抄 土屋文吉編

二人女房 尾崎紅葉著★
 子規歌集 正岡子規著★
 墨汁一滴 正岡子規著★
 病牀六尺 正岡子規著★
 仰臥漫錄 正岡子規著★
 漾虛集 夏目漱石著★
 坊つちやん 夏目漱石著★
 草枕 夏目漱石著★
 行 入夏目漱石著★
 こゝろ 夏目漱石著★
 硝子戸の中 夏目漱石著★
 道 草夏目漱石著★
 明 暗 上巻夏目漱石著★
 明 暗 下巻夏目漱石著★
 風流佛・一口劔 幸田露伴著★
 五重塔 幸田露伴著★
 自然と人生 徳富蘆花著★

北村透谷集 島崎藤村編★
 文道遺稿 笹川龍風編★
 観音岩 前篇川上眉山著★
 観音岩 後篇川上眉山著★
 源をぢ 他二篇 國木田獨步著★
 運命論者 他二篇 國木田獨步著★
 號 外他六篇 國木田獨步著★
 蒲團・一兵卒 田山花袋著★
 生 田山花袋著★
 田舎教師 田山花袋著★
 晚翠詩抄 土井晩翠著★
 たけくらべ 樋口一葉著★
 藤村詩抄 島崎藤村自選★
 千曲川のスケッチ 島崎藤村著★
 生ひ立ちの記 島崎藤村著★
 櫻の實の熟する時 島崎藤村著★
 飯倉だより 島崎藤村著★

春を待ちつつ 島崎藤村著★
 高野の靈泉 鏡花作★
 歌行 燈泉 鏡花作★
 風流懺法 他三篇 高濱虛子著★
 上田敏詩抄 茅野巖々編★
 有明詩抄 藤原有明著★
 泣菫詩抄 薄田位置著★
 宣言 有島武郎著★
 長塚節歌集 寶藤茂吉選★
 入江のほとり 正宗白鳥著★
 生まざりしならば 正宗白鳥著★
 千鳥 他四篇 鈴木三重吉作★
 桑の實 鈴木三重吉作★
 銀の匙 中 勸助作★
 煤 煙 森田草平作★
 和解 或る男 志賀直哉著★
 小僧の神様 他十篇 志賀直哉著★

白秋詩抄 北原白秋著★
 白秋抒情詩抄 北原白秋著★
 海神丸 野上彌生子著★
 大石良雄 野上彌生子著★
 そ の 妹 武者小路實篤著★
 幸 福 者 武者小路實篤著★
 人間萬歳 武者小路實篤著★
 友 情 武者小路實篤著★
 波 山本有三著★
 青銅の基督 長興善郎著★
 陸奥直次郎 長興善郎著★
 出家とその弟子 倉田百三著★
 布施太子の入山 倉田百三著★
 偷 盜 芥川龍之介著★
 侏儒の言葉 芥川龍之介著★
 河 童 芥川龍之介著★
 春夫詩 鈔 佐藤春夫著★

厭世家の誕生日 佐藤春夫著★
 英・米文學
 ユートピア (理想郷) トマス・モア著★
 ベーコン隨筆集 神吉三郎譯★
 フォーリクス博士 マロロウ作★
 闘技者サムソン ミルトン作★
 プレイク抒情詩抄 譯者文章註★
 パインズ詩集 中村爲治譯★
 ラム沙翁物語 野上彌生子譯★
 イン・メモリアム テニスン作★
 イノック・アーデン テニスン作★
 クリスマス・カロール 森田草平譯★
 爐邊のこぼろぎ 本多顯彰譯★
 プラウサ ウル 譯者 勇譯★
 喜劇 論 相良徳三譯★
 エレホン 山本政喜譯★

ペーター論集 田部五治譯★
 ハーデイ短篇集 森村 豊譯★
 ハーデイ短篇集 森村 豊譯★
 月下の怪劇 (他五篇) 森村 豊譯★
 ワカダイ東西文學評論 十一谷巖三郎譯★
 オ・ヘルン 三宅幾三郎譯★
 新アラビヤ夜話 佐藤藤樹譯★
 寶 島 ステイヴンソン作★
 ジーキル博士とハイド 岩田良吉譯★
 サロメ 佐々木直次郎譯★
 獄中記 オスカ・ワイルド著★
 人と超人 ショウ作★
 鰥夫の家 ショウ作★
 思想の達し限る限り (原名メトセラ時代に關し) 相良徳三譯★
 聖女チヨウン 野上彌一郎譯★
 ビータア・パン 本多顯彰譯★
 アイルランド童話集 山宮 允譯★
 隊を組んで歩く妖精達 山宮 允譯★
 争 闘 ゴールズワージ作★
 静寂の宿 本多顯彰譯★

ユリシイズ (一) ジェイムズ・ジョイス著 森田・名原他四名譯 ★★
 ユリシイズ (二) ジェイムズ・ジョイス著 森田・名原他四名譯 ★★
 ユリシイズ (三) ジェイムズ・ジョイス著 森田・名原他四名譯 ★★
 ユリシイズ (四) ジェイムズ・ジョイス著 森田・名原他四名譯 ★★
 ユリシイズ (五) ジェイムズ・ジョイス著 森田・名原他四名譯 ★★
 マンスフィールド 崎山正毅譯 ★★
 短篇集 アーウィン・ゲルグレン著 高垣松雄譯 ★★
 スケッチ・ブック 高垣松雄譯 ★★
 自然論 エマソン著 片上仰譯 ★★
 若い集 優しき少年他十篇 佐藤清譯 ★★
 緋文字 佐藤清譯 ★★
 エヴァンジェリン ロングフェロー著 齋藤悦子譯 ★★
 ボウ黒猫 (他六篇) 森田卓爾譯 ★★
 マン詩集 有島武郎選譯 ★★
 王子と乞食 マク・トウエン著 村岡花子譯 ★★
 小公子 若松賤子譯 ★★
 おしなご 若松賤子譯 ★★
 おぢさん 遠藤高子譯 ★★
 荒野に生れて 本多顯彰譯 ★★

地平の彼方 オニール作 清野暢一郎譯 ★★
 賢者ナータン 大庭米治郎譯 ★★
 フアウスト第一部 森田外譯 ★★
 フアウスト第二部 森田外譯 ★★
 ヘルマンとドロテア 佐藤通次譯 ★★
 若いゼルテルの悩み 茅野繁々譯 ★★
 ギルヘルム 上巻 久野テヲ譯 ★★
 ギルヘルム 下巻 久野テヲ譯 ★★
 マイスター 下巻 久野テヲ譯 ★★
 たくみと戀 實吉捷郎譯 ★★
 グレンシニクティン 常良譯 ★★
 ヴイルヘルム・テル 櫻井政隆譯 ★★
 黄金寶壺 石川道雄譯 ★★
 牡猫の人生 上巻 秋山六郎兵衛譯 ★★
 牡猫の人生 下巻 秋山六郎兵衛譯 ★★
 全グリム童話集 第一 金田鬼一譯 ★★

全グリム童話集 第二 金田鬼一譯 ★★
 全グリム童話集 第三 金田鬼一譯 ★★
 全グリム童話集 第四 金田鬼一譯 ★★
 全グリム童話集 第五 金田鬼一譯 ★★
 全グリム童話集 第六 金田鬼一譯 ★★
 全グリム童話集 第七 金田鬼一譯 ★★
 ゲエテの對話抄 エツケルマン著 龜尾英四郎譯 ★★
 ハルツ紀行 内藤匡譯 ★★
 みづうみ他三篇 關泰祐譯 ★★
 三色堇・溺死 伊藤武雄譯 ★★
 村のロメオとユリア 草間平作譯 ★★
 忘れぬ言葉 淵田一雄譯 ★★
 埋木 森田外譯 ★★
 アルト ハイデルベルク 香匠谷英一譯 ★★
 ソアーナの異教徒 ハウプトマン著 橋本忠夫譯 ★★
 日の出前 ハウプトマン著 橋本忠夫譯 ★★
 沈鐘 ハウプトマン著 阿部六郎譯 ★★

希臘の春 ハウプトマン作 城田皓一譯 ★★
 改春の目ざめ ヴェーグキント作 野上豊一郎譯 ★★
 悪童物語 實吉捷郎譯 ★★
 トオマス・マン短篇集 實吉捷郎譯 ★★
 トオマス・マン短篇集 實吉捷郎譯 ★★
 トオマス・マン短篇集 實吉捷郎譯 ★★
 平 行 久保菜譯 ★★
 ジェククリースと 人相良守峯譯 ★★
 祖 妣 岡本修助譯 ★★
 維納の辻音楽師 石川健次譯 ★★
 み れ ん シュニツツラ作 ★★
 ア ナ ト ー ル シュニツツラ作 ★★
 佛・白文學 小宮豊隆譯 ★★

マノン・レススコオ アベ・プレヴォ作 河盛好誠譯 ★★
 懺悔録 上巻 石川道雄譯 ★★
 懺悔録 中巻 石川道雄譯 ★★
 懺悔録 下巻 石川道雄譯 ★★
 ボオルとウィルジニイ 木村太郎譯 ★★
 ア ド ル フ コンスタン作 ★★
 ダール赤と黒上巻 桑原武夫譯 ★★
 ダール赤と黒下巻 桑原武夫譯 ★★
 スタン赤と黒下巻 桑原武夫譯 ★★
 パルムの僧院上巻 前川堅市譯 ★★
 戀 愛 論 上巻 前川堅市譯 ★★
 戀 愛 論 下巻 前川堅市譯 ★★
 從兄ポンス 前篇 水野亮譯 ★★
 從兄ポンス 後篇 水野亮譯 ★★
 知られざる傑作 (他五篇) 水野亮譯 ★★
 海邊の悲劇他三篇 水野亮譯 ★★
 エトルリアの壺 (他五篇) 杉捷夫譯 ★★
 コ ロ ン バ 捷夫譯 ★★

カルメン 杉捷夫譯 ★★
 屋根裏の哲人 木村太郎譯 ★★
 椿 姫 吉村正一郎譯 ★★
 ブチ・シヨウズ 八木さわ子譯 ★★
 陽気なタルタラン 小川泰一譯 ★★
 風車小屋だより 小川泰一譯 ★★
 月曜物語 櫻田一徳譯 ★★
 聖母と軽業師 (他四篇) 大井征譯 ★★
 昔がたり アナトール・ララス作 杉捷夫譯 ★★
 ノ ア・ノ ア 前川堅市譯 ★★
 過 去 岸田國士譯 ★★
 氷島の漁夫 ビエル・ロチ作 吉江喬松譯 ★★
 お菊さん 野上豊一郎譯 ★★
 女の一生 モーパッサン作 杉捷夫譯 ★★
 生の誘惑 (原名イヴ) モーパッサン作 前田晃譯 ★★
 モウパッサン短篇集 前田晃譯 ★★
 頭飾 (他七篇) 前田晃譯 ★★
 ビエルとジヤン モウパッサン作 前田晃譯 ★★

即興詩人下卷森 鴨 外譯 ★★
 アミエルの日記 (一) 河野與一譯 ★★
 アミエルの日記 (二) 河野與一譯 ★★
 アミエルの日記 (三) 河野與一譯 ★★
 アルプスの山の娘 ヨハンナ・スピア作 野上彌生子譯 ★★
 プランドン ドイブセン作 角田 俊譯 ★★
 キイランド短篇集 前田 昇譯 ★★
 島の農民 ストリントベルク作 草間平作譯 ★★
 大海のほとり ストリントベルク作 藤 藤譯 ★★
 父 ストリントベルク作 小宮豊隆譯 ★★
 令嬢 ユリエ ストリントベルク作 茅野 鷹々譯 ★★
 稲妻 ストリントベルク作 小宮豊隆譯 ★★
 幽霊 曲 ストリントベルク作 小宮豊隆譯 ★★

東洋思想・文學

孔子家語 藤原 正校譯 ★★
 論語 武内義雄譯註 ★★
 子思 子藤原 正譯註 ★★
 菜根 譚 山口黎常譯註 ★★
 孫子 阿多俊介譯註 ★★
 鹽鐵 論 曾我部靜雄譯註 ★★
 楚辭 辭 橋本 循譯註 ★★
 陶淵明集 漆山又四郎譯註 ★★
 李太白詩選上卷 漆山又四郎譯註 ★★
 李太白詩選下卷 漆山又四郎譯註 ★★
 杜 詩卷之一 漆山又四郎譯註 ★★
 杜 詩卷之二 漆山又四郎譯註 ★★
 杜 詩卷之三 漆山又四郎譯註 ★★
 杜 詩卷之四 漆山又四郎譯註 ★★
 唐詩選 上卷 漆山又四郎譯註 ★★
 唐詩選 下卷 漆山又四郎譯註 ★★
 唐詩選 (附作者) 漆山又四郎譯註 ★★
 寒山詩 太田梯藏譯註 ★★
 通俗古今奇觀 波多野清一譯 ★★
 魯迅選集 佐藤春夫譯 ★★

文藝評論

朝鮮童話選 金素雲譯編 ★★
 朝鮮民話選 金素雲譯編 ★★
 ボワロー詩 學 丸山和馬譯註 ★★
 マルクス・エンゲルス 上田 進譯編 ★★
 文學史の方法 テエヌ著 瀧沼茂樹譯 ★★
 佛蘭西文學史序説 プリントニエル著 關根秀雄譯 ★★
 ギュイ社会学上より見た 大西克禮譯 ★★
 ギュイ社会学上より見た 小方庸正譯 ★★
 ギュイ社会学上より見た 小方庸正譯 ★★
 ギュイ社会学上より見た 小方庸正譯 ★★
 ギュイ社会学上より見た 小方庸正譯 ★★
 この後の者にも ラズキン著 西本正英譯 ★★
 建築の七燈 ラズキン著 高橋松川譯 ★★
 胡麻と百合 石田正順譯 ★★
 回想のセザンヌ 有島生馬譯 ★★

歴史

フランツ シユウベルト 辻 莊一譯 ★★
 ベルン 歴史とは何ぞや 坂口 昂譯 ★★
 ハイム 歴史とは何ぞや 小野鐵二譯 ★★
 伊太利文藝 上巻 プルクハルト著 村松恒一郎譯 ★★
 復興期の文化 上巻 村松恒一郎譯 ★★
 世界人類史物語 上巻 鈴木 厚譯 ★★
 世界人類史物語 下巻 鈴木 厚譯 ★★

哲學・教育

フランク ラテスの辯明 久保 勉譯 ★★
 トンク リト 阿部次郎譯 ★★
 フラプロ タゴラス 菊池憲一郎譯 ★★
 マス 形而上學 高桑純夫譯 ★★
 スピノ 哲學體系 小尾範治譯 ★★
 スピノ 知性改善論 島中尙志譯 ★★
 ヒューム 人間機械論 杉 捷夫譯 ★★
 ヒューム 人性論 太田善男譯 ★★
 純粋理性批判 上巻 天野貞祐譯 ★★
 純粋理性批判 (改訂版)

實踐理性批判

カンプロレゴメナ 天野貞祐譯 ★★
 實踐理性批判 波多野清一譯 ★★
 ヘーゲル哲學の批判 佐野文夫譯 ★★
 將來の哲學の 根本命題 植村晋六譯 ★★
 唯一者とその所有 卷上 草間平作譯 ★★
 唯一者とその所有 卷下 草間平作譯 ★★
 唯一者とその所有 卷中 草間平作譯 ★★
 自然認識の限界について デンボレモン著 坂田徳男譯 ★★
 哲學の貧困 浅野 晃譯 ★★
 マルクス・ドイツイエ・リヤゲノフ編 三木 清譯 ★★
 エンゲルス イデオロギー 三木 清譯 ★★
 反デニールンク論 卷上 エンゲルス著 長谷部文雄譯 ★★
 反デニールンク論 卷下 エンゲルス著 長谷部文雄譯 ★★
 フォイエルバッハ論 佐野文夫譯 ★★
 エンゲルス 自然辯證法上巻 加古祐二譯 ★★
 エンゲルス 自然辯證法下巻 加古祐二譯 ★★
 エンゲルス 自然辯證法下巻 加古祐二譯 ★★
 この人を見よ 安倍能成譯 ★★
 反時代的考察上巻 井上政次譯 ★★
 反時代的考察下巻 井上政次譯 ★★

幸福論

眠られぬ夜 第一部 草間平作譯 ★★
 幸福論 草間平作譯 ★★
 哲學の本質 戸田三郎譯 ★★
 世界觀の研究 山本英一譯 ★★
 七大哲人 安倍能成譯 ★★
 ケーベル博士隨筆集 久保 勉譯 ★★
 人間の精神 立花祐雄譯 ★★
 哲學とは何か、 河東 涸譯 ★★
 イマヌエル・カント 河東 涸譯 ★★
 歴史と自然科学・道 篠田英雄譯 ★★
 徳の原理に就て 篠田英雄譯 ★★
 永遠の相下に 他三篇 篠田英雄譯 ★★
 ヴァンデル 哲學概論 第一巻 連水・高桑・山本譯 ★★
 ヴァンデル 哲學概論 第二巻 連水・高桑・山本譯 ★★
 心理學原論 リツプス著 大脇 一譯 ★★
 自然に於ける美 ソロウイヨフ著 高村理智夫譯 ★★
 藝術の一般的意義 高村理智夫譯 ★★
 ノレハヘーゲル論 笠 信太郎譯 ★★
 カントとゲエテ 谷川徹三譯 ★★
 認識の對象 リツケルト著 山内得立譯 ★★

唯物論と經驗此上卷 佐野文夫譯 ★★
 唯物論と經驗此中卷 佐野文夫譯 ★★
 唯物論と經驗此下卷 佐野文夫譯 ★★
 エミイル(第一篇) 平林初之輔譯 ★★
 エミイル(第二篇) 平林初之輔譯 ★★
 エミイル(第三篇) 平林初之輔譯 ★★
 エミイル(第四篇) 平林初之輔譯 ★★
 エミイル(第五篇) 平林初之輔譯 ★★
 獨逸國民に告ぐ 大津康譯 ★★

宗教

アウグスの懺悔錄 フォン・ハルツク著 山谷省吾譯 ★★
 (改譯版) マルティン・ルター著 石原謙譯 ★★
 基督者の自由 石原謙譯 ★★
 エニス 林達夫譯 ★★
 法句經 荻原雲來譯 ★★
 臨濟錄 朝比奈宗源譯 ★★
 法華義疏 上卷 聖徳太子御註 花山信勝校註 ★★

法華義疏 下卷 聖徳太子御註 花山信勝校註 ★★
 弘法三教指歸 加藤精神譯 ★★
 上人愚迷發心集 高瀬承殿校註 ★★
 歎異抄 金子大栗校訂 ★★
 正法眼藏隨聞記 和辻哲郎校訂 ★★
 日蓮上人文抄 姉崎正治校註 ★★
 一遍上人語錄 藤原正校註 ★★
 夢中間答 佐藤泰輝校訂 ★★
 禪海一瀾 今北共川著 太田博藏校註 ★★

自然科學

アラブスの氷河 (第一部) 矢島祐利譯 ★★
 フアラ蠟燭の科學 クルツクス編 矢島祐利譯 ★★
 種の起原 上卷 ダーウキン著 小泉丹譯 ★★
 人及び動物の表情について 沼中濯太郎著 ★★
 ダルンアラブスの旅より 矢島祐利譯 ★★
 ダルンアラブス紀行 矢島祐利譯 ★★

アラブスの氷河 (第二部) 矢島祐利譯 ★★
 天才と遺傳 上卷 ゴールトン著 ★★
 天才と遺傳 下卷 ゴールトン著 ★★
 雜種植物の研究 小泉丹譯 ★★
 フアール昆蟲記 山田吉彦譯 ★★
 第二分册・第五分册・第九分册
 第十分册・第十二分册・第十三分册
 第十四分册・第十七分册・第十八分册
 第二十分册 既刊 定價各★★

生命の不思議 上卷 後藤格次譯 ★★
 生命の不思議 下卷 後藤格次譯 ★★
 自然美と其驚異 板倉勝忠譯 ★★
 チャールズ・ダーウキン 小泉丹譯 ★★
 ラプラタの博物學者 岩田良吉譯 ★★
 家畜系統史 加茂儀一譯 ★★
 科學の價值 田邊元譯 ★★
 科學と方法 吉田洋一譯 ★★
 科學者と詩人 平林初之輔譯 ★★

史的に見九る 科學的宇宙觀の變遷 寺田實彦譯 ★★

法律・政治

アリストアの國家論 マキアヴェリ著 黒田正利譯 ★★
 君主論 黒田正利譯 ★★
 法の精神 上卷 宮澤俊義譯 ★★
 法の精神 下卷 宮澤俊義譯 ★★
 人間不平等起原論 本田喜代治譯 ★★
 民約論 平林初之輔譯 ★★
 權利のための闘争 イーリング著 日沖靈郎譯 ★★
 近代民主政治 卷一 松山武義譯 ★★
 近代民主政治 卷二 松山武義譯 ★★
 近代民主政治 卷三 松山武義譯 ★★
 近代民主政治 卷四 松山武義譯 ★★
 慣習と權利 青山道夫譯 ★★
 法と國家 堀野真樹譯 ★★

經濟・社會

ケネー經濟表 増井幸雄譯 ★★
 スイ國富論 上卷 氣賀重譯 ★★
 スイ國富論 下卷 氣賀重譯 ★★
 マル初版人口の原理 高野岩三郎譯 ★★
 サス 大内兵衛譯 ★★
 經濟學及課税之原理 小泉信三譯 ★★
 地代論 山口正吾譯 ★★
 ミル自傳 西本正美譯 ★★
 資本論初版鈔 長谷部文雄譯 ★★
 賃労働と資本 長谷部文雄譯 ★★
 賃銀・價格および利潤 長谷部文雄譯 ★★
 フランスに於ける内亂 木下半治譯 ★★
 マル猶太人問題を論ず 久留間敏造譯 ★★
 改訂國家の起源 西恩格爾著 加田哲二譯 ★★
 住宅問題 加田哲二譯 ★★
 エング空想より科學へ 淺野晃譯 ★★

道徳の經濟的基礎 シュタウディンガー著 草間平作譯 ★★
 經濟的財價值 ボーム・バウエル著 長守善譯 ★★
 資本論解説 大里傳平譯 ★★
 經濟學入門 佐野文夫譯 ★★
 資本蓄積論 上卷 長谷部文雄譯 ★★
 資本蓄積論 中卷 長谷部文雄譯 ★★
 資本蓄積論 下卷 長谷部文雄譯 ★★
 資本蓄積再論 長谷部文雄譯 ★★
 ローザ・ルクセンブルグの手紙 松井圭子譯 ★★
 戦争論 上卷 馬込健之助譯 ★★
 戦争論 下卷 馬込健之助譯 ★★
 戦争論 下卷 喜多野清一譯 ★★
 エングス原始基督教史考 喜多野清一譯 ★★
 カウツキー基督教の成立 喜多野清一譯 ★★
 フワッ 労働者綱領 小泉信三譯 ★★
 暴力論 上卷 木下半治譯 ★★
 暴力論 下卷 木下半治譯 ★★
 ベル婦人論 上卷 草間平作譯 ★★
 ベル婦人論 下卷 草間平作譯 ★★

婚姻の諸形式 ミユラー・リッパイ著 木下史郎譯 ★
 戀愛と結婚 上卷 エレン・ケイ著 原田實譯 ★★
 戀愛と結婚 下卷 エレン・ケイ著 原田實譯 ★★
 マルクス・エンゲルス傳 リアザノフ著 長谷部文雄譯 ★★
 レー何を爲すべきか 平田良鑑譯 ★★
 カール・マルクス (他五篇) レーニン著 伊藤弘譯 ★
 レーニンの ゴオリキへの手紙 中野重治譯 ★
 シ帝国主義 長谷部文雄譯 ★★

ゴ	村	白	葉	イ	譯	作	★
中	森	鷗	外	作	★		
本	ヂ	ヤ	ク	・	ロ	ン	ド
多	顯	彰	譯	作	★		
佐	ワ	々	イ	木	直	次	郎
譯	作	★					
中	嘉	治	隆	篤	一	編	介
校	著	★					
關	シ	ユ	ト	泰	ル	祐	ム
譯	作	★					
淵	パ	ウ	ル	・	ハ	イ	ゼ
譯	作	★					
草	ヒ	間	ル	平	テ	作	イ
譯	著	★					
速	水	・	高	桑	・	山	本
譯	著	★★					
バ	ウ	ィ	ン	デ	ル	哲	學
論	第	一	部	上			
概	論	第	二	部			
夫	詩	鈔					
春	夫	著					
雲	萍	雜	志				
柳	銑	三	校	訂	著		
★							

最 新 刊

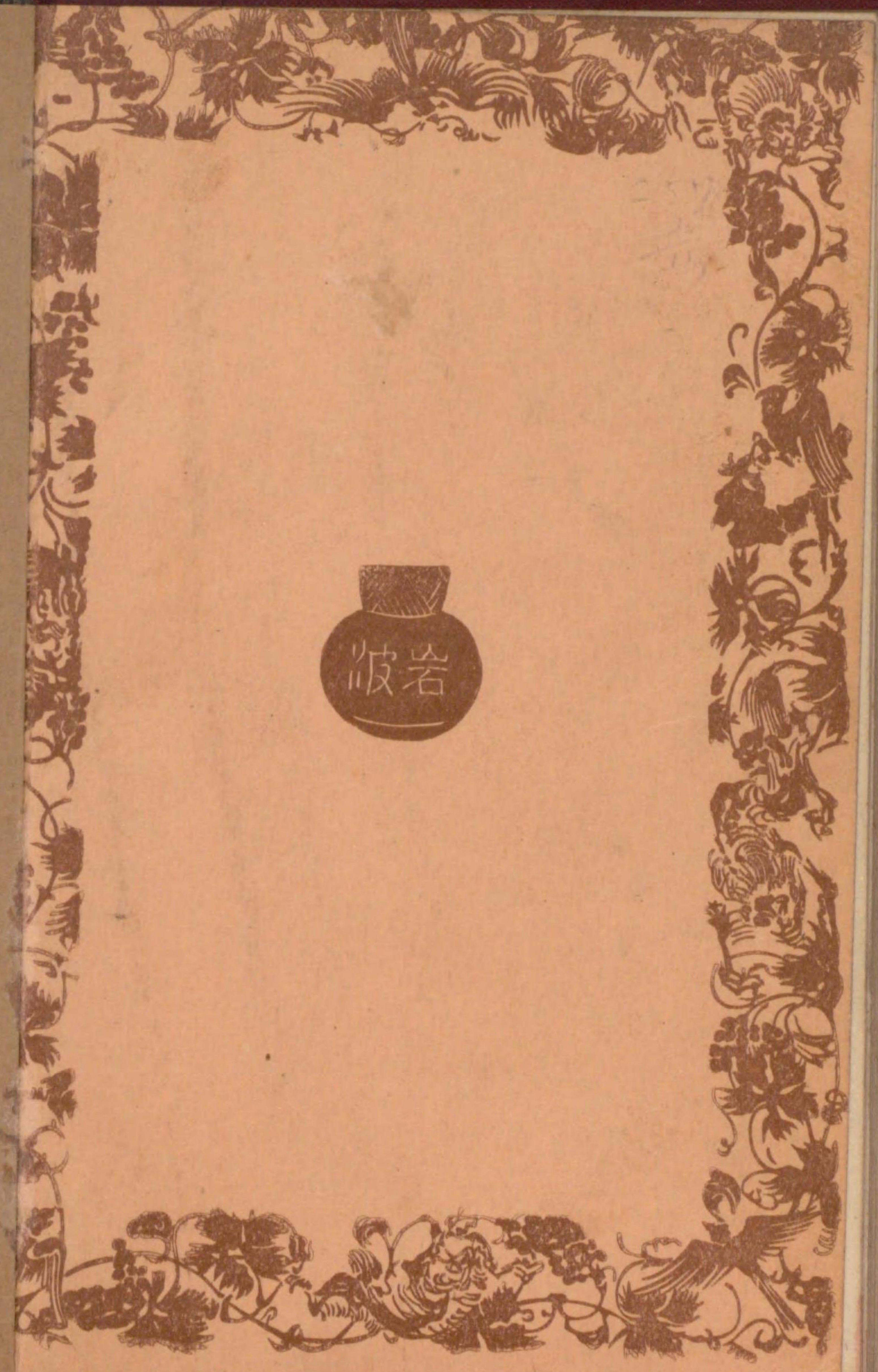
ど	雁	荒	野	に	生	れ	て	底
中	森	鷗	外	作	★			
サ	ワ	々	イ	木	直	次	郎	譯
作	★							
一	年	有	半	・	續	一	年	有
校	著	★						
み	づ	う	み	他	三	篇		
譯	作	★						
忘	ら	れ	ぬ	言	葉			
譯	作	★						
眠	ら	れ	ぬ	夜	の	た	め	に
譯	著	★						
バ	ウ	ィ	ン	デ	ル	哲	學	概
論	第	一	部	上				
概	論	第	二	部				
夫	詩	鈔						
春	夫	著						
雲	萍	雜	志					
柳	銑	三	校	訂	著			
★								

569
14

最 新 刊

大乗起信論	鎖を離れたプロメテ	決闘・妻	キップリング詩集	ニレロシアに おける 資本主義の 發展上卷	六百番歌合・六百番陳狀	カストロの尼	アルプス登攀記上	ミル經濟學試論集	兆民選集	牡猫ムルの人生觀下卷
宇井伯壽譯註	河上徹太郎譯	チエ西一ホ 清フ	中村爲治選譯	大山雅岩 雄共譯	峯岸義秋校訂	桑原武夫譯	浦松佐美太郎譯	末永茂喜譯	嘉治隆篤一編校	秋山六郎兵衛譯
★	★	★★	★	★★★	★★★	★	★★	★★	★★	★★

5



569
14

